
(習作) 白猫が願うモノ

湯元シンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（習作）白猫が願うモノ

【Nコード】

N7500Q

【作者名】

湯元シンジ

【あらすじ】

タタリによる聖杯戦争の再演を書いたもの。

レンちゃん（白い方）と皆大好き殺人鬼をメインに、型月キャラが奮戦するお話……になる予定。

あくまで予定なので途中で打つ棄るかも。心と時間に余裕のある方推奨です。

0 日目・夜：白猫と殺人鬼（前書き）

本文は型月二次創作となっております。何かの間違いでこのページにいらっしゃった方はご注意くださいますようお願い申し上げます。

また、この物語はありがちな内容と残念な文章力と存在しないプロットによって構成されています。

まー、楽しんでいただければ幸いです。どーぞ。

0日目・夜：白猫と殺人鬼

断線していた自我が唐突に呼び起こされた。適切な表現が見当たらないが、たった今、俺という存在はこの場に呼び出されたい。視覚を奪うような強い光が周囲に満ちている。これでは視覚が役に立たない。既に目を閉じ光に眩むのを避けている。

ほとんど無意識に嗅覚と聴覚が情報を集める。

嗅ぎ慣れた路地裏の饅えた匂い。現実にしる幻想にしるここで惨劇が起きたという情報はここを異界たらしめている。

もう何度目になるか分からないが、覚醒未満の脳髄は飽きもせず定型句を吐き出させる。

「眠い。おいそれと人を起こすなと言う。まあ、俺を起こしたってことは、殺せてことだよな？」

返る筈のない独白。
けれど。

「残念だけど、殺してなんて頼まないわ。どうしてもって言うなら付き合わないこともないけれど」

ツンと澄ました声がそれに答えた。

眠たげな視線を脇に向ける。

白。と言う言葉がソレを正しく表現するものだろう。

「これはこれは。誰かと思えば『元』マスターじゃないか。こんな路地裏に一人で来るなんて、いけない子だ」

敢えて『元』を強調してみせる。容易く縛れるなどと思い違いをされてはお互いのためにならない。

「し、仕方ないじゃない。貴方呼び出すにはここが一番都合がいんですもの」

繰り出される戯言は真意を探るそれ。案の定と言うべきか少し声が上擦っている。可愛いものだ。

「分からないな。なんだって俺を呼び出したんだ？ マスターが欲しいならそこら辺の人間を捕まえて操り人形にするなんて容易いだろう」

「ただの人間に私のマスターが務まると思って？」

そう、この白猫は気位だけは高いのだった。それにしたって出来損ないの殺人鬼にはもったいない使い魔だ。もっともそういう関係はお互いの了承によって成り立つものであって、一方的に話を進められてはおもしろくない。

「俺なら務まると？ 光栄だね、それは」

大きく伸びをし、体の性能を確かめる。寝起きだと言うのに力が漲る。これなら小さな白い花を手折ることなど容易い。右袖にあるわずかな重さは何よりも信頼できる相棒^{七ツ夜}がきちんと収まっていることを示していた。

たったこれだけで七夜志貴、という存在は十全なのだ。そしてこの身は俺を呼ぶ者を殺すだけのモノ。

言葉だけで容易くオレを縛れるなどと思い上がっている子猫にお仕置きをして、さっさと最低な亡者生活に戻るとしよう。

こちらの気配が変わったのを察したか、レンの赤い眼が小さく揺れた。全く可愛いものだ。それなりに楽しく解体^{バラ}せそうなのはなにより。

「どうしても、って言えば付き合ってくれるんだろう、レン？」

「分かっではいたけれど。そんなにも欲しそうな顔をして。それでも紳士？」

やれやれ、とでも言いたげなレンだが乗ってくれるようだ。後は楽しい時間を満喫するだけでいい。

だというのに。得体の知れない接続が目の前の白猫との間に見つかる。どうやらコレが俺を維持しているらしい。じろり、とレンを睨む。

殺気は乗せておいたのに、レンはあっさりと戦う姿勢を放棄した。

「気付いたかしら。わたしが貴方のマスターになるの。勘違いしないで下さる？」

「………笑えないよ、レン。これで俺を縛ったつもりかい？」

それなりに頭は回る方だと思っていたのだが、存外この白猫は俺というものを理解していなかったようだ。生殺与奪で俺は縛れない。殺人を望む以上殺される覚悟など常にできている。

「お望みなら縛ってあげてもいいのだけれど——貴方縛られるの嫌いでしょう？」

すつ、とレンがたくし上げた左袖の下に、白い肌を覆う不可思議な刺青が見えた。瞬間、

令呪：聖杯戦争においてマスターが持つ、サーヴァントへの絶対

命令権

能内に明らかに自分のものではない記憶が走った。

「確かにイレギュラーな召喚を行ったわたしにも責任はあるのだけれど。少しは話を聞きなさいよ。バカ志貴」

悪びれもせずに白い少女は嘯いた。

なるほど。俺が気付いていなかっただけで、どうやら彼女はきちんと手綱を握っていたらしい。

首輪を填められるのは真っ平だが、しかし。

「それ、殺せるんだろうな？」

何のことはない。この身が求めるのは殺人のみ。

「もちろん、楽しめることは保障するわ。でなきゃ貴方なんて呼ばないわよ。詳しい説明はあと。契約をしてもらっわ。『わたしをマスターと認める』と」

小さな身体で仁王立ちしてみせるレン。

やれやれ、とは思うもののここは付き合っておくべきか。なにしろ迂闊な所を見せ過ぎた。

す、と膝を折り騎士のごとく頭を垂れる。

「楽しませてもらえる限り、身を粉にして仕えさせて頂きますよ、マスター」

0 日目・夜：白猫と殺人鬼（後書き）

特には。お話進んでないしねー。

1日目・朝：遠野志貴の日常（前書き）

秋葉様、お許しください！

志貴君の日常です。解説要員（聞き手）として活躍する予定。

主人公としての取り回しのよさから、七夜君とレンちゃんの出番を奪いそうで怖いです。

1日目・朝：遠野志貴の日常

継ぎ接ぎのように黒い線が走った白。もう嫌というほど見慣れた天上だ。ズキリ、と頭が痛んだ。

コンコン、というノックの音も、もう馴染み深い物となっている。とはいえきっちり俺が目覚ましているのは珍しい。

「翡翠、ちよつと待って」

ドアの外に声を放ってベッドから机の上をまさぐる。声をかけなかったら翡翠は構わず部屋に入ってきて来ていただろう。どちらかという寝汚い俺は、そうやって結構翡翠に世話を焼かせていたのだ。

手にしたのは黒縁の眼鏡。度は入っていないがこれは遠野志貴が遠野志貴であるために必要不可欠なものなのだ。

天上の継ぎ接ぎが消えたのを確認して翡翠に声をかける。

おそらくは礼儀作法に則った手順で彼女は俺の部屋に入ってくる。

翡翠はドアの側でぺこり、と一礼してみた。

「おはようございます。志貴さま」

エプロンドレスを着こなす彼女は、ここ遠野家でメイドというちよつと変わった仕事をしている。正確には使用人なのだそうだが、そこそこ裕福とはいえごく普通の家庭で育った俺には使用人、という言葉はメイドという言葉以上に意味不明だ。

「おはよう翡翠。レンもおはよう」

いつもどおりの朝。階下から漂う朝食の匂いが鼻腔をくすぐる。傍らに眠る黒猫を撫でつつ、ベッドから起き上がった。翡翠の視線

が妙に怖い。

「朝食の用意はできておりますので、お早く。秋葉さまもお待ちです」

「わかった。着替えてすぐ行くよ。ほらレン、朝だよ」

ベッドの上でもぞもぞと動く黒ネコを促しつつ、ピシッとアイロ
ン掛けされたシャツに腕を通し、学ランと鞆を腕に提げる。

鞆は1学期最後の日にふさわしく、志貴の内心のように軽い。

目をこすりながらもようやく人型を取ったレンの手を引き、食堂
へと向かった。

「おはよう、秋葉」

紅茶のカップを片手にこっちを睨んでいる義妹へと手を上げた。

「遅いですよ、兄さん」

「いつも待たせて悪いな。秋葉」

「悪いと思っているのなら、もう少し早く起きてください」

口では文句を言いながらも秋葉の機嫌は悪くない。

「あはは、ごめんな」

「そうですよ、志貴さん。秋葉様は志貴さんとの朝食を楽しみに待
っているんですから」

「こ、琥珀!」

和盆に朝食を載せて琥珀さんが食堂へと入ってくる。

秋葉がなにやらぶつぶつと呟いているが怖いから聞こえないこと
にする。

「おはよう、琥珀さん」

「ええ、おはようございます、志貴さん」

浅蜷の吸い物と卵焼きに焼き鮭、炊きたてのご飯。

テーブルに並んだそれは、どれも和風好みの志貴がここに来てから出されるようになったメニューだ。

レンの世話を焼きながらの朝食。それを視線で咎める秋葉も楽しそうに見ている琥珀さんも、少し離れて後ろに控えた翡翠も何もかもがいつもどおりだ。

「そうだ、兄さん。明日から夏休みですけど、なにかご予定がありますか？」

朝食も半分ほど進んだ頃になって秋葉がそう切りだした。

秋葉的には食事中の会話というものに違和感を覚えるのだそうだが、頭のとっぺんから足先まで完全に庶民として育てられた遠野志貴にしてみれば、会話のない食事はどれほど美味でも味気ない。欲を言えば翡翠と琥珀さんにも同席して欲しいぐらいなのだ。

「いや、今のところはなにも。有彦に映画に誘われてるぐらいかな。なにかあるのか？」

実を言えばどこぞのアーパー吸血鬼やカレー教の教祖からいろいろと誘われているが、取り敢えず保留にしてある。

「いえ、シュラインの工事が終わったとこのことで立食会に誘われているのですが、兄さんもどうかと」

「へえ。シュラインか」

立食会など、遠野家の人間としての教育を受けていない俺が出て
も恥をかくだけではないか、という危惧が頭をよぎる。学生であり
ながら遠野家の家長の務めを果たしている秋葉の足を引っ張りたく
はない。不出来な兄がいる、という評価が秋葉の努力を傷つけるの
はごめんだ。

だけど。

ちょうど一年前の夏。そこに纏わる一連の事件に巻き込まれ、一
人の友人を得た。

「……いいね。迷惑じゃなければ、行くよ」

異国の地で目的の為に身を削っているだろう彼女を思う。身の振
り方をそろそろ考えなくてはならない時期だ。彼女の思い出に力を
貰うのも悪くないかもしれない。

それに二度と交わらない道などと彼女は言っていたが、また会え
るところかで信じている自分がいる。どうしたって忘れられるよう
な出来事ではなかったけれど、たまには思い出しておかないと。

「迷惑だなんてそんな……ああ、兄さんと出かける立食会
ならば参加の価値があるというものです」

自分の世界に入り込んでぶつぶつとなにやら呟きだした義妹を視
界から外す。いろいろと残念な妹を朝っぱらから直視するのは健康
に良くない。

「もうこんな時間か。ご馳走様、琥珀さん」

「いえいえ、お粗末様です」

ちらり、とトリップしている秋葉に視線をやり、

「悪いけど、秋葉を現実に引き戻してやってくれ。学校に遅れないうちに」

「心得てますよ、志貴さん」

ぐっ、と親指を立てる琥珀さんがやけに楽しげな事に一抹の不安を覚えつつ、席を立った。

「じゃあレン行ってくるよ」

愛猫をひと撫でして翡翠から鞆を受け取る。なんにもかいつも通りの朝を遠野志貴は心から満喫していた。

1日目・朝：遠野志貴の日常（後書き）

日常編がしばらく続きます。

彼らがどーしてこの物語に絡んできたのかは書かないわけにはい
かないのです。

もう少し退屈な日常にお付き合いください。

1日目：遠野志貴の苦悩（前書き）

シエル先輩お許しください。

説明要員その2。解説キャラとして定評のある方がようやく現れました。型月二次を読んでいる人は凡その各作品の流れを知ってるんだろう、という前提で書いてますが、いいんだろうか。

つか、もう志貴主人公でよくね、これ？

1日目：遠野志貴の苦悩

いつも通りの学校。一日早めの夏休みに入ったらしく有彦の姿はなく、つまりは平和そのもの。

クラスの連中は夏休みの予定で盛り上がっている。

「有彦の奴、映画はどうするんだよ。チケットもう取ったのに・・・」

「

机の上の二枚のチケットは有彦に頼まれて自腹で買ったもの。昼飯代以外に定期収入の無い（義妹からお小遣いをもらうのは気が引ける）自分にとっては大きな出費だ。

「もったいないですから、私と行きましょう」

「わわっ、先輩!？」

相変わらずの神出鬼没。埋葬機関の第七位はカレー教をひろめる為に日本滞在期間を延ばしたとその筋では専らの噂。異端審問の日は近い。大丈夫か埋葬機関。

わざわざ学校に暗示をかけなおしてまで三年に居座ったのだ。カレーに掛ける熱意は如何ほどのものか。想像したくない。

不幸中の幸いというべきかクラスは別にしてくれたいらしい。なんでも、アーパー吸血鬼が学校へ乗り込んでくるのを恐れての事だとか。ありそうな事なので懸命な判断だと思う。

「こんにちは、遠野君。夏休みのご予定ですが――」

「まだ何も約束はできませんよ、先輩。秋葉の性格は知ってるでしょう?？」

出鼻を挫かれた、という顔で先輩が黙った。ちよつと前までは周りの女性達の押しの強さに好き放題やられていた自分だが、いい加減慣れた。

「遠野君がいつまでも曖昧な態度だから妹さんがあなのです。一度ビシッと言ってみてはどうですか？」

一理あるとは思っけれど、

「先輩は俺に死ねと言つのですか？」

命が惜しいのです。

しかしあの粗暴さを何とかしなくては兄として安心してお嫁に行かせられません。あれ、いや秋葉は当主だから婿でも取るのかな。まあ同じ事だけど。

「まさか。ですが、逃避行のお供ぐらいなら喜んでしてあげますよ」

埋葬機関の第七位を道連れに逃避行など恐ろしくて想像したくも無い。

「冗談きついですよ。で、お話はこの間の旅行の事ですか？」

「いえいえ、今日は全国カレー巡り計画ではなくてちよつとそのここでは言いにくい話です。話すか話さないか迷ったんですが、やはり話しておこうと思います。あとで茶道部に来てください」

表情は柔らかいままだが、目だけは面倒見のいい先輩ではなく、埋葬機関の第七位のそれだった。

「……わかりました。放課後に必ず」

どうやらつかの間の平穩は失われつつあるらしい。

「先輩？　いないのかな」

茶室に座り込む。胡坐ではなく正座。有間の家での時間は思いのほか体に染み付いているようでうれしい。畳敷きの部屋は遠野の屋敷には離れにしかない。

（都古ちゃん元気かなあ）

都古ちゃんのタックルと啓子さんの権謀術数が怖くて最近是有間の家には近づいていない。どちらも致死攻撃を繰り出してくるのでそれなりに勇気があるのだ。自然文臣さんの安否が気遣われるが、あの人はどっちも喜んで受け入れるのだろう。愛ゆえに。

そんなくだらない事を考えていたら、からり、と障子を滑らせて先輩がやってきた。

「あら、遠野君早かったですね。今お茶を――」

機嫌よさげに先輩は茶釜を風炉へと置く。作り笑いは見えていて痛々しい。

「先輩。大事な話なんでしょう?」

さつさと本題に入るが吉と、無駄話は遮って止めた。

「……はい。遠野君は巻き込まれやすい性質ですから釘を刺しておこうかと」

今度は満面の笑み。今茶室の障子を開いた者は正しく蛇に睨まれた蛙ということわざを理解するだろう。

いかなる原理が既に茶釜の湯は煮立っている。魔術って隠匿しなきゃならないものだったのではないのでしょうか。

「……巻き込む気まんまんですか」

とは言え先輩に頼りにされるのはうれしい。事と次第によっては秋葉に殺されかねないが。

そう思ってニヤニヤしていると先輩にため息を吐かれた。心なしか視線が怖い。

「……やっぱりお茶入れますね」

「はい（否定しないんですね、先輩）」

しぼしの沈黙。茶器が立てる音と蝉の声が茶室を支配する。

どうぞ、差し出された椀を受け取る。熱い。ずずず、と茶を啜る。有間の家でやらかしたらタダではすまない真似だが、ここでは作法は勘弁願いたい。

「遠野君は聖杯というものを知っていますか?」

碗を置くのを見計らったような先輩の問い。聖杯と言われてもいまいちピンと来ない。

「聖杯っていうと最後の晩餐で使われたっていう――」

宗教、というものに疎い自分でもキリストを中心に弟子たちが両脇に座った一枚の絵はなんとなく記憶にある。

「どちらかと言うともっと俗な方ですよ。願えばなんでも叶えてくれる。そしてこの聖杯を巡り七つの魔術師七つの英霊が争う大儀礼を聖杯戦争と……」

先輩の口から語られたのはおよそ御伽噺の世界だった。

冬木という街で起きた第五次聖杯戦争の顛末。教会として把握している範囲ですが、という前置きがついたものの何とか話の筋を理解できた。

先に起きた事件に巻き込まれていなければ到底信じられなかっただろう。

とはいえ、大聖杯は破壊されたのだという。直死の魔眼が必要な事態を想像できない。

「それで先輩は俺になにをさせたいんです？」

「なにもしないでくれれば一番いいんですが。放っておくと絶対に遠野君は巻き込まれますから。監督役であるわたしの監視下に置いておく、というのが落としどころでしょうか」

困った人ですね、と言う顔で先輩がこっちを見る。

「いつそ秋葉さんに鎖でつないでもらいたいぐらいに危険です」

ぼそり、と恐ろしい事を口にする先輩。冗談でも止めてほしい。その手がありましたか、とか言って実行するに決まっている。運悪く夏休み。監修割烹着の悪魔、舞台設定沈黙メイドの地獄のような監禁生活が一ヶ月に渡って行われる様がありありと浮かぶ。

はっ、いかんいかん。良くない想像は良くない現実を引き寄せるのである。

「……………それより危険なんて想像できかね——え？ 待ってください、監督役って」

大聖杯が破壊されたなら、聖杯戦争は起こりえない。なぜ、監督役なんて話が。

「確かに冬木の大聖杯は破壊されました。ですが——ここから先は絶対に無理はしないと遠野君が約束してくれないと話せません」

「う、前向きに善処しつつ検討します」

俺だって平穩の方が好きなのだ。ただ止むを得ず体が先に動いてしまうような事態が目の前にあったりする、というだけで。

「……………はあ。まあいいでしょう。ワラキアの夜、次の出沒は冬木になると『穴倉』から計算報告が届きました。あらゆる願望を死に誘導する。冬木の大聖杯の性質はワラキアの夜の好むところでしょう。すでに冬木の監督役から聖杯戦争が起きてようとしていると報告が来ています」

ワラキアの夜。幻影の夜を以って滅びを謳う飲血鬼。俺に出来たのはあれの出現を止める事だけ。問題を先送りしたに等しい。ならばこの先で奴が出す犠牲の幾許かには俺の責任もあるのではないだ

ろうか。

「ほら、遠野君はそう言う顔をするでしょう?」

「先輩、冬木に行くんですか?」

「教会から監督役を補佐するようにと指令が来ていますから。出来れば遠野君には美咲町で大人しくしていて欲しいんですけどね」

半ば諦めたような先輩の言葉。今はそれに甘えようと思う。

「俺も冬木に行きます。今度こそワラキアの夜を倒す」

それがあの日、挫け掛けた友人に戦う事を強制した俺のけじめだろう。

「それにしても、どうして先輩はこんなこと俺に教えてくれたんです? ワラキアの夜にしたって黙ってれば俺が行き着くとは思えない」

決意と共に現れた疑問。自分に厳しくせになんだかんだで俺には甘いこの人がこんな話を俺に聞かせてくれるのはちょっと変だ。指摘すると先輩は目に見えて表情を厳しくした。

「……とりあえず約束は取り付けましたから構わないでしょう——未確認ながら、シオンⅡエルトナムが来日している、という情報が耳に入りました。彼女から遠野君に連絡がくる可能性は極めて低いですが、彼女の置かれた状況を考えればそれは0ではありません」

シオンが来る。

言われてみれば当然だ。ワラキアの直系である彼女が、その吸血

衝動を抑えるためにはタタリの排除が必要不可欠なのだから。

そしてシオンが正しく俺を友人だと思っていてくれるなら、俺に一声掛けてくれてもいい。

「シオンは、いつこつちに来たんです？」

「一週間前、という報告を受けています」

それはシオンにその気があれば、俺に連絡を寄こすのに十分すぎる時間だ。

まだ彼女は一人で闘おうというのか。握り締めた制服の裾がぎつと鳴いた。

「彼女の気持ちも分かってあげてください。それに……」

先輩が不自然に声を切った。

「それに、なんですか？」

「これはまだ遠野君には教えられません。確信が持てたらきちんと教えてあげますから今は待ってください」

少しでも情報が欲しい、というのが表情に出ていたのだろう。

先輩の顔は辛そうに歪んでいて、それは俺のせいだと分かった。

「分かりました。その話お受けします」

もうこの話は完全に他人事ではない。先輩にもわかったのだろう。ため息と共にうなずいてくれた。

でもその後には紡がれた言葉は完全に予想外で。

「仕方が無いですね。ちゃんと秋葉さんを説得してから来てくださ

「いね？」

ぞくり、と背筋に寒気が走った。

「どうしました？ 遠野君」

「ちょっと寒気が。風邪かな」

遠野の家に帰っちゃだめな気がしてきた。

「いけませんね。今日は切り上げましょう。何度もいいますがくれぐれも良く考えてくださいね」

「分かってますよ。それじゃ、お茶ごちそうさまでした」

茶器を片付けている先輩の背中に頭を下げた。

1日目：遠野志貴の苦悩（後書き）

というわけで志貴参戦決定です。

どうまとめるかなんて考えちゃいないのでちょーつとまずいかも。
いい加減プロット書かないとかなあ。

1日目・朝：伽藍の堂（前書き）

橙子さんはかつこいいな！。

式はあんまり喋らないイメージがあります。興味がないことには口出ししないし、結論が出たことは自分の中に留める、というか。喋って欲しいのですが。

1日目・朝：伽藍の堂

コンビニの弁当を朝食に、僕は通勤ラッシュに紛れて入社した。足を少し引きずる身には辛い。

出社、というのなんだか変な話ではある。きちんと仕事はしているし、何故だか給料もちゃんと支払われてはいるものの、自分の仕事を人様になんと言って説明すればいいのかよく分からない。

人の流れも疎らになった頃、僕が勤める会社は見えてくる。

建築デザイン事務所兼人形工房『伽藍の堂』

どうみたって廃墟である。背の高い塀こそあるものの、やっぱり廃墟。

工事途中に投げ出された建物を買取ったとは所長の言葉だが、それにしたってこれはどうかしてる。

もっとも蒼崎橙子、という名を持つ彼女の在り方を考えればこれは妥当なのかもしれないが。

カッソカッソと寂しげな音を立てる非常階段を登ってドアを押し開ける。なんだって4階に事務所なぞ構えたのだろう。何度か尋ねた事もあるが、理解できる言葉は返ってこなかった。

会社に着くと壁に背を預けたまま突っ立っている式と、事務机で煙草を燻らしている所長がこっちをみた。

「遅いぞ黒桐。大した仕事があるわけじゃないが、勤務時間ぐらいは守れ」

まったくどこいつもこいつも、などと呟いている。

「はあ、すみません」

取ってつけたような謝罪を口に出し、何かあったの？ と式に視線で問うが首を横に振られた。

「何か急ぎの仕事がありましたっけ」

「いいや、お前にはないよ。私が不機嫌なのはなかなかない出物だというのに買い付ける金がない、ということだ。魔術的な付加価値はほとんど皆無で実用的なものではないのだが数が少ない上に手放す人間も少ない、という代物でね」

嫌な、予感がした。

「生活費ぐらいなら妹の貯金から引き落とすんだが、これは私の趣味だ。あいつの金で買う気にはならない。仕方がないので普段なら受けないような仕事を請ける羽目になったんだが、クソ。依頼人が分からず屋でな、写真でいいから寄せせというのに下見に来いと譲らない。既にこっちは資材の調達に入っているっていうのにだ。断るにも断れん。何しろ前金すらまだだからな」

一度この人とはちゃんと話し合う必要があるそうだとおもにお金の使い方と仕事の請け方について。

「どうにもこの状況はきな臭い。私を呼びつけたい何かがあるんだろう、とは思っている」

橙子さんが忌々しげに灰皿に煙草を押し付けた。

「まだ、資材の買い付けをただけなんですよね？ その依頼はお断りして、手元に来た資材を生かせそうな依頼を受注すればいいんじゃないですか？ ほら、浅上建設から大口の依頼が入ってましたよね。あれなんかどうです？」

平社員に過ぎない自分にはこう答えるのが精一杯。

「藤乃の一件でこの間の報酬は吹っ飛んだからな。似たようなことになっては堪らない。あれは断ってしまったよ」

ちらりと壁にもたれて黙っている式を見やる。視線には気付いていくせに式はこっちを見ない。まああの事件に関しては式を責めるのはお門違いだろう。

確かあの仕事はテナントを譲り受ける形で報酬の一部が支払われていた。なるほど、テナントがなくなってしまうえば赤字、というのは納得だ。でもソレとこれとは話が違うだろうに。

「それじゃあ、行くんですか？」

正直なところ橙子さんが何をそんなに嫌がっているのかはわからない。魔術師を自称するような人で、実際に不思議な力を見せられたこともあるので疑うわけではないのだけれど。

「行かんわけには行くまい。なにしろ私の趣味のためだからな。この仕事で発生する利益は消えるからそのつもりでいてくれ」

心底嫌そうに行つて橙子さんは立ち上がってコートを羽織った。眼鏡はしないらしい。

「そんな無茶苦茶な……今月の給料、ちゃんとでるんでしようね？」

社員の生活を守るなんて殊勝な考えを微塵も持ち合わせてないのはどうかと思う。まあ押し掛けて雇ってもらった弱みもあるのだが。

「勝手に都合してくれ。ああ貸してやってもいいぞ、トイチで構わないならな」

くつくつと性悪そうに歯を見せて笑う橙子さん。惚れ込んでる従兄の将来が危ぶまれた。

「遠慮します。この年で自己破産なんてごめんですから」

もつとも、懐には結構な余裕があつたりする。

（式を映画にでも誘ってみるか）

このごろ式は余り元気がない。一連の事件はまだ思い出にはなっていないのだろう。

「それと式は連れて行く。一人寂しく労働の尊さでも噛み締めていろ。ではな、黒桐」

トランクをぶら下げて、煙草を胸ポケットに押し込んでいる橙子さん。

「……………式ですか？」

「そ、悪いが荒事になりそうだね。一人寂しくお留守番でもするといい」

「——橙子、幹也を煽るな。幹也、オレはすぐ戻る。お前は大人しくしてろ。まだ足、痛むんだろ？」

いつのまにか式は玄関の戸に凭れて立っていた。

「お気遣いどうも。でもね、式。キミが心配させるような真似をしなければ、僕はいつも大人しくしてるよ」

ヒューヒュー、と吹けてない口笛は橙子さんのもの。

「……お前はいつもそうだ」

式は怒ったように飛び出して行ってしまい、橙子さんもそれに続いて。

思い出したように玄関で振り返った。

「私達が行くのは冬木、という街だ。出来るだけ早く戻るつもりだが、場合によってはしばらく滞在することになるかもしれない。一日中ここにいることはないが、用事を頼む事もある。一日一度は留守電を確認しておけ」

「はあ。覚えておきます」

「戸締りはよろしく頼んだ。土産を期待するなよ」

そのまま玄関の向こうへ橙子さんは消え、しばらくして車のエンジン音が会社を出て行くまで、僕は突っ立っていた。

1日目・朝：伽藍の堂（後書き）

空の境界からは橙子さんと式が参戦します。

狡猾で用意周到な橙子さんがこんな理由で巻き込まれてくれるのかは正直怪しいところ。

本筋に絡まず、傍観者になっちゃうかもしれませんが、なんとか前に出てきて欲しいなーと。

1日目・昼：殺人鬼の苦悩（前書き）

「やっちゃまったぜ」

「やっちゃまったぜじゃないですよ、もう！」

「ズエピアは犠牲となったのだ」

「ズエピアエ・・・」

「ごめんなさい。」

1日目・昼：殺人鬼の苦悩

一体なんだってこんなわけのわからない事になったんだろうか。俺はただ殺しを望んだだけなのに。

レンに連れられて戦争の舞台へとやってきたのはつい2時間ほど前のことだ。性能が足場に左右される俺は街を見て回りたかったが、同盟者への挨拶が先だと言うレンに従い、俺は拠点として利用しているという民家へと向かったわけだが。

既にそこは民家などではなく、人外の魔境だった。

「こんな街中に拠点を構えるには、少々俺たちは異常じゃないか？」

マスターの性格はなんだかんだで甘い。無闇に人を巻き込むことは避けたいはずだ。

そして無駄な人死にを避けたいなら、こんな街中に拠点を置くことが間違っている。

「あーまー、いいじゃないか。シオンがいつて言ってるんだから。なにしろ久々のベッドだ。人間らしい生活でこそ人間らしい精神は守られる」

「そうよ。大体殺人鬼の言うことじゃないわ。ああ、一日の終わりにシャワーを浴びられるなんて」

長身の騎士が気だるげに。白猫がからかうように。

しかしこれはそうやって冗談にしている問題ではない気がする。全く、殺人鬼にツッコミ役が回ってくるほどにこいつらは狂っている。

「シオン、君は何かいいかね？ ハムか？ ダイコンか？ ソーセージかね！？」

おまけに突如キッチンから響き渡る狂ったような叫び声。ご近所さんから苦情が来る日は近い。

「食べられるよう調理して頂ければなんだって構いません」

「嘆かわしい。人間の娯楽を知らぬままでは人など救えないと教えてはさすが」

「私を吸血鬼にした貴方に言われる筋合いではありません、キャスター」

そう。シオンはアレをキャスターとして呼び出したらしい。腐っても錬金術師、なにかしらの思惑があるとは思うが、それは未だ明かされていない。

「それはいちいちごもつとも。お望みの通りに調理させて頂くとして」

「それから殺人鬼、この民家はキャスターによって神殿化されている。実音声の遮断とダミーとしての生活音の放出もぬかりはない」

思考を読まれた。エーテライトの使用を疑いシオンを睨む。

「同盟者にエーテライトを使うのは、一年前で懲りました。貴方の疑問を言い当てたのは私の予測です」

高速思考、分割思考。そしてなによりこの娘の分析力を以つてすればこの程度は容易いのだろう。

「同盟者なんて勝手に言ってるのはうちのマスターとあんた等だけ

だよ。俺もそうだななんて思わない方が身のためだ」

今度ははつきりと殺意を乗せる。ソファーに座っていた男女がピクリ、と身体を起こしかけ、やめた。

「私なりに貴方を分析してみたのですが。そもそも貴方は聖杯に望むものなどないでしょう」

確認するように錬金術師はこちらの顔を窺う。
当然黙殺した。

「貴方は殺人鬼。それも過程を楽しむ傾向がある。戦う場と極上の相手を用意できる我々と共にいるのは貴方にとってメリットだ」

「カッタカッタカッタカッタオオ！！！」
「わわ、すごいです！」

ピクツ、とシオンのこめかみが引き攣った。

悪性情報で刻まれた食べ物というのは口にしても大丈夫なのだろうか。

「縛られることは不服であっても殺しを楽しむ、という貴方の目的を考えればこれ以上は選べない」

「皮などという野菜屑は不要だ」

「もったないですよー」

シオンはそれでも真摯な表情はくずさない。他人の内面を暴こうというのだ。当然といえば当然だが感心すらしていた。よくもアレに耐えられるものだ。

「加えて貴方は決して無能でも怠惰でもない。どうせ手綱を握られ

ているなら精々意を汲んで自らの戒めを緩める努力はするでしょう」

「早い幕だったな、人参」「お湯はまだ沸かないんで待ってくださいね」

ぶちり、と何かが切れる音がここまで聞こえてきた。

「以上が貴方が同盟に参加する理由——」つるさいですよ、キャスタアアアア——」

台所に駆け込むシオンの後姿を見送り、ソファーに転がって雑誌を読む男女とレンに顔を向けなおす。

「まだ気を張るつもりなの、志貴？ 貴方もさっさと慣れることだわ」

「動くな。さっきの安全は保障する」「弁えたまえッ！」

雑音がひどい。全くレンの言うとおりだ。これ以上頑張ったら俺はこいつ等を皆殺しにしてしまいかもしれない。しばらくは大人しく飼われよう。

「いい加減疲れた。お前らの流儀に従うよ」

「うんうん。それがいい。リーズバイフェ・ストリンドヴァリだ。よろしく頼む」

「失せろタタリ。台所に貴方の居場所などありません」「ツマラナイツマラナイ、食べるだけなんてツマラナイイイイ——！！」

すっと差し出された手を見た。彼女の手は戦うもののそれ。つくづくどうかしてる。利き手を相手に差し出すなんて。

雑音？ 何のことやら。

「七夜志貴だ」

何を言っても無駄なのだろう。大人しく利き手で握り返した。俺もどうかしている。

「クラス名で呼ばなくてもいいのかい？」

「名を知られて困るほど高名な人間じゃない。まあ、望むならアサシンとでも殺人鬼とでも呼んでくれ」

諦めたような俺の声を、理解はできるよ、という顔でリーズバイフェが薄く笑って。

不機嫌そうに顔をしかめたレンが投げた雑誌の角が、俺の頭に直撃した。

1日目・昼：殺人鬼の苦悩（後書き）

なんちゃってシリアスが続くと思ったか、おれだよ！
ほんとすみません。全部ワラキアのせいです。

1日目・夜：路地裏同盟（前書き）

各作品の時系列、結末ともご都合主義的にいじってあります。明記してしまうと手が止まっちゃうのでなんとなくお察しください。

1日目・夜：路地裏同盟

仲間は得た。聖杯戦争に介入する手段も手元にある。

それでも問題は山積していた。

まずは一つ目。戦力の不足。

吸血種としての自分は脆弱で、夢魔もまた決して強くはない。さつきの力は強力だがそれでは足りない。戦う者、として機能するのはリーズぐらいのものだ。

路地裏同盟の指揮を執る事になった以上、この困難を排斥するための知恵は私が搾り出さねばならないのだ。

だというのに。

「ふむ。舞踏会に招かれるのは久々だが、此度の主催者はいささか不慣れと見える。指導するのは先達として当然の役目か」

自分のサーヴァントすら御しかねているなんて。

（——私にズエピアを御せるのか）（——知らぬ者よりは演算が容易いハズ）

「なに心配することは無い。役者の質は十分。ならば『私』はうまくやるだろう。君はそこから喜劇を眺めていればいい」

この街に巢食う不確定因子を考えれば、それでも最低限の手足だというのに。なにしろ私達はこの虚言に関わる全てを敵に回すことになるのだ。

（2番、3番停止——迷うな。既に何度も計算したはずだ）（——確率だけみれば十分）

「しかし君が私を呼ぶとは。背に腹は変えられないといったところかね。ああ、舞台は自由に見て回るといい。『私』の脚本はその程度では崩れないよ」

「ごちゃごちゃと五月蠅い。こんなものに頼らなければならないなんて、なんて矛盾。」

（思考統合——吸血鬼化の治療には時間がある。願望機の利用が最短。乗り切るしか）

「キャスター。席を外します。くれぐれも軽はずみな行動を取らないように」

「……つれないな。いやはや年頃の娘というのは解りかねる」

背後で楽しげに笑う己が従者を忌々しく思いながら、シオン「エルトナム」アトラシアは仲間と共に冬木の街へ降り立った。

「正気か、お前？」

大まかな私の説明を聞いた殺人鬼の第一声は的を射ていた。正気ではこの作戦にはならない。今はまだ悟られてはならない。これは私が口を出す問題ではないのだから。

「ええ残念ですが。しかし殺人鬼。貴方に正気を問われるとは思いませんでした」

「ハッ、性能に問題があるんじゃないか、錬金術師。なんだってそんな綱渡りをするんだい。らしくない」

小馬鹿にした態度を崩さない殺人鬼。真意を探りたいのだろう。

「私達は同盟を組んでいるとは言えその目的は違う。全員の目的を達成するとなれば策も危くなるというものです」

「そんなことは知らないよ。大体俺には目的すら明かされていない」

七夜志貴の視線は私と夢魔を射抜いている。リーズは我関せず、とばかりにソファーから動かないし、ズエピアとさつきは食器を洗いに席をはずしていた。

「私の目的は先ほども言ったようにタタリの討伐だ。あれを倒せば私の吸血衝動は消える。その上で聖杯を手に行けるようなら吸血鬼化という病の根絶を聖杯に願ってもいい」

そう。現在この街に発生した聖杯、というものはタタリによるデッドコピーだ。

本来ならばワラキアの夜という術式を遥かに凌駕する聖杯をタタリがコピーしたところでその性能は十全には程遠い。

だが、この街に溢れる魔力を聖杯が利用できるのであれば話は別だ。過去五回に渡り、聖杯へと蓄えられた魔力は一度として使われることはなかった。

破壊されたとは言えたった一年前のこと。そこにあった魔力は未だに拡散し切れていないのだ。

本来無色を装う聖杯は、ワラキアの夜という悪意に満ちた意志に

よって再生されることで、その魔力を回収しようとしている。

根源にさえ通じる、という大聖杯はある意味ワラキアの夜という術式によって至る結末を短縮しうる秘奥。これをタタリが見逃す確率は低い。

あるいはタタリが別のものに目移りする、という可能性を考えた上で私はサーヴァントにタタリを選んだ。

令呪のバックアップを掛ければ、ほんの一瞬であってもタタリであれば聖杯を再現できるのだから。

「まるっきりの他力本願ではないということは分かったよ。それでレンの望みつてのはなんなんだ？」

私の穴だらけの言葉には興味をなくしたらしい殺人鬼は、切り口を変えてきた。

それにしたってその質問はあんまりだろう。レンは下を向いて黙ってしまった。

「……………なんというか。貴方はやはり志貴とは裏表なのですね」

「どついう意味かな？」

殺意を乗せた視線が身体を貫く。それでも私は余裕を崩さなかった。

私の話を正しく理解し、かつ穴があることまで察して黙っている程度に気が利くこの男がレンの望みを察せないなんて、朴念仁だ。そして朴念仁には私は少しだけ耐性がある。

「レン、いいですね」

私の、話してしまうぞ、という確認に弾かれたように顔を上げたレンは、志貴の顔をちらりと盗み見てやっぱり下を向いてしまう。

「許可はもらえなかったのでヒントだけ。私の計画を効率的に進めようと思っていたのなら、私は貴方ではなく別の存在を呼ぶようにレンに指示しているべきではないですか？」

最終的にタタリを殺さなければならない私の計画において、殺人鬼という存在は何の役にも立たない。

殺意はそのままに私の目を覗き込んでいた殺人鬼の目を睨み返す。

「……はあ。俺が悪かったよ。ままならないな、そんな理由じゃ怒れない」

席を立った殺人鬼はレンを一瞥し、玄関へと向かった。

「どちらへ？」

「風に当たってくるよ。まったく、恥ずかしくて仕方がない」

背中越しではあったけれど、殺人鬼が赤面しているのを確信した。

「一つ訂正します。貴方は志貴よりもずっと聡い」

返事はなく、少し乱暴に閉められたドアの音だけが残った。

1日目・夜：路地裏同盟（後書き）

ステータスなんぞ置いておこうかと。

【クラス】アサシン

【マスター】レン

【真名】七夜志貴

【性別】男性

【身長・体重】169cm・57kg

【属性】中立・悪

筋力 C 魔力 E

敏捷 A 幸運 C

耐久 C 宝具 E

【クラススキル】

気配遮断：C

暗殺者として身につけたそれ。心音や関節の軋みまでを遮断することとは出来ないが、そもそも魔力がないに等しいので一般人と認識させる程度のことはできる。

【保有スキル】

心眼（真）：C

修行、鍛錬において培われた洞察力。

浄眼と合わせて用いることでその価値を増大させる。

浄眼：C

通常視覚では見えないものを視る。魔術的な動作を見抜ける。

勇猛：D

本来は幻覚・混乱に対する抵抗力だが、七夜志貴においてはただの蛮勇。死地に容易く踏み入る程度のもの。

宗和の心得：C

技を見切られないようにする特殊な技能。

見切られた時点で七夜としてはおしまいなので、見切られた七夜は死んでいる。逆説的に生きている七夜は技を見切られない。

技を見切られない訓練と言葉遊び程度の心得。

そのうち追加したりするでしょう。

1日目・夜：代行者と代行者（前書き）

誰だよ、ドライブの整理ついでにホロウのデータ消したの。
わずかな時間を見つけてプレイすることにします。

1日目・夜：代行者と代行者

コツ、コツ、コツと寒々しい音が反響する。

夜の帳が下りたこの教会にあつては、蠟燭のぼつとした明かりさえ温かみの欠片すら感じられない。

前任者である言峰綺礼の気配はすでに立ち消え、言峰教会は正しく教会として機能していた。静謐を乱す下僕の影も見当たらない。情報収集に走らせているのだから当たり前と言えば当たり前だった。つつ、とオルガンを指先で撫でた。

「おかしいことになったものです。着任早々これでは」

講壇の向こうに沈む闇へと声を投げる。

「貴女の落ち度ではないでしょう。そして貴女はきちんと勤めを果たしている。ならば主の御心は貴女と共にあるでしょう、カレン＝オルテンシア」

まるで福音のように社交辞令が謳い上げられる。闇から滲み出るように埋葬機関の第七司祭が姿を現した。闇色のカソックは衰えた視力で捉える事が難しい。自然生首が浮いているように見える。不愉快だ。

「狂信者に縄張りを荒らされていい顔をする人間がいるとは思えません。ましてや唐突に寢所へ足を踏み入れられるなど屈辱です」

埋葬機関。底抜けの異常者で構成された異端を狩る異端者の群れ。上辺で取り繕った言葉は用を成さないのだから、本心をぶつけてしまった方が健全というものだ。

もつとも、備品程度の扱いであるこの身も代行者には違いないのだから他人をどうこう言うのは筋違いかもしれない。

「非礼は詫びましょう。狂信者呼ばわりも許しましょう。ですが辞令が下った以上、私は私の責務を果たす他ない。こつも容易く根城に侵入を許す者に協力など望むところではないと理解して頂きたい。怠惰が過ぎますよ、カレン」

茫、と暗闇で薄く光る翠の両眼は一切の曇りなく思考を読ませない。同じ神を信奉するものとしてそのあり方は理解できるものの、共感できるはずがない。そもそも代行者というものは変人奇人の集りだ。無理に手を取りあう必要はない。

「あのー、先輩。あちらは一緒に仕事をされる方で敵ではないんですよね？」

唐突に場違いな声がかソックの影から響いた。

第七位の影になっていたとは言え、私の眼にもしつかりとその姿は映っている。

「ええ。ですが味方、というわけでもありません。仮にも埋葬機関に身を置きながら言う言葉ではありませんが、あまり教会や協会の関係者を信用して掛からないようにしてください。ただでさえ遠野君は人がいいんですから」

とたんに気配を軟らかくする代行者。とっかかりは掴めた。が、今の今まで気配を感じさせなかった少年はいったい何者か。

深く考えるまでもない。埋葬機関の第七位が遠野君、と女の子のような声色で呼ぶのなら、彼がそうなのだろう。

一人足手まといを連れて行きます、と事前に連絡は受けていたの

だから。

「貴方が遠野志貴ですか」

既に第七位の代行者には興味を失っていた私は志貴という青年に向かつて足を踏み出した。

びくり、と青年は一步下がって少しよろけた。

「確かに俺が遠野志貴だけど——あんたそれ、辛くないのか？」

「辛い、とはどういうことでしょうか？」

「いや、いい。きつと気のせいだ。こんなの」

それっきり志貴は押し黙ってしまった。シエルに辛く当たったのが気に障ったのだろうか。あんなもの陰険な代行者なら日常会話だというのに。

「とりあえず今日は顔を見せにただけです。監督役ならこちらに引き込める主従にも心当たりがあるでしょう。お話はその時にでも」

微妙な空気を察したか、シエルがまとめに入った。
わたしとしても異論はないのでうなずいてみせる。

「では今夜はこれで。市内のホテルを取っていますので連絡はこちらに。行きますよ、遠野君」

部屋番号とホテル名だけが記された紙切れをこちらに手渡し、シエルは青年を引き連れて出て行った。

見送るでもなかったってわたしは別のことを考えていた。タタリでもなく、聖杯戦争でもなく。

「簡単なおつかいだというのに、あの犬はいつたいなにをやっているのかしら」

夕食の材料を取りにいった下僕の未帰還が心にひっかかっていた。

1日目・夜：代行者と代行者（後書き）

シリアスなカレンに興味はないのです。

下僕を虚仮にしつつ、あるのかないのか分からない気遣いが見え隠れするような錯覚を覚えるぐらいがちょうどいいのです。

1日目・夜：殺人鬼と槍兵（前書き）

それぞれ違ったかつこよさを体现する漢達に、自分の在り方が揺らぐ七夜君。このままポエマー路線を突っ切っていいものか。そもそもこの口調がワラキア成分によるものではないと断言できるのか。本当の俺ってなんだろう。

殺人鬼は自分を探す旅に出る。その旅路の果てに一人の青年が見出したモノとは！？

嘘ですすみません。

しかしなんというかこう、英霊共はほんとにかっこいいよなあ。

1日目・夜：殺人鬼と槍兵

風に当たって来るなどと言ってはみたものの、見知らぬ街の地理など知る由もない。暇に飽かしてあちこち見て回ろうと思う。

この時間になると住宅地には帰路につく人がまばらに在る程度で、学ラン姿の俺は特に目立つこともないようだ。気配も消さずに街を歩くことにした。

この街では聖杯戦争と言う魔術師の戦争が起きているらしい。らしい、などとその戦争のシステムに組み込まれた俺が考えるなどおかしな話ではあるが、植えつけられた知識が与える情報は紙面の情報を読み取るようなものだから、らしい、という表現は正当だ。

一介の暗殺者にすぎない自分には理解しがたいが、この戦争は夜中に見表面化するものであるという。

正しく今は夜中で、自分はただの一般人ではなくサーヴァント。これが何を意味するのかをきちんと理解した上で俺はひっかかるものを感じていた。

魔術師にサーヴァント。どちらも期待できる獲物だ。そしてあちらにもこちらを殺す意志がある。これは喜ばしいことだ。

自身は殺人を楽しむ鬼である。暗殺、という分野において殺し合になるなど手落ちもいいところだが、俺にとってはどちらでも構わない事だ。こちらから仕掛けようがあちらから仕掛けようが関係のない事。

ただ悦楽を甘受すればいい。

特にサーヴァント。これは本来暗殺者として二流の糞餓鬼に過ぎない自分には余るような存在だ。

英雄でもない自分がサーヴァントという枠に入り込んでいるのは恐らくタタリが聖杯を模している状況をシオンとレンがうまく利用

した結果だ。バックアップは受けているものの、イカサマなしで英霊などという高みに上り詰めた輩は文字通り格が違う。

恐れはない。むしろそんな化け物をどうやって殺してやるうかと考えるだけで脳髓が痺れる。

では、このひっかかりはなんだろう。

「考え中悪いがやるのかやらないのか早く決めてくれ。こっちは後が立て込んでるんだ」

七夜の里で子供達が使っていたような粗末な釣竿とバケツを下げた男が目の前に立っている。堅気には見えないもののどう見たって釣り道楽の帰り道、といった風情のこの男はサーヴァントだという。目の前の男がサーヴァントである、と俺の感覚が教え、サーヴァントか？ と尋ねたら男はああそうだ、と応えたのだから間違いない。

「あんたみたいな極上なのとやれるなんて夢のようだけど、随分とやる気がないじゃないか。相手が糞餓鬼では不満ってことかい？」
「てめえだつて獲物も構えちゃいないだろうに。あとやる気がないのはこの後面倒が控えてるからだ。見る。一日座ってたつてのにひどい釣果だろ」

言つて男はバケツを置いた。お世辞にも大きいとは言えないカサゴが二匹力なく泳いでいる。ビチリ、と跳ねた。一日座っていた、という男の言葉を信じるならひどい有様だと思う。

「才能ないんじゃないか？ そこの子供だつてもうちよつとやる」
「普段はこうじゃないんだがな。周りで大騒ぎしやがる阿呆共のせいだ」

忌々しげに男は顔を歪めた。

なんだってこいつはそんなところで一日も過ごしたのだろう。馬鹿じゃあるまいか。

「腐れマスターには逆らえん。大人しく下僕やってる方が損が少ない」

言いつつ男は言葉ほど嫌そうな顔をしていない。

マスターか。そういえばレンの了承を取っていないことに気がついた。まさかそんなくだらなことが枷になるとは思えない。理性に枷をつけられるなんて殺人鬼としても二流だ。認めるわけにはいかない。それこそが俺なのだから。

「で、やるのかやんないのかさっさと決めてくれ。男らしくはないが釣果に水増ししないと罫に戻るに戻れん」

男の言外の意味に気がついてカチンときた。いくら糞餓鬼でもそこまで舐められちゃたまらない。コイツは俺と買い足す予定の魚を天秤に掛けてどっちでもいいと言っているのだ。

殺気を作って男にぶつける。お互いを視認しているのだ。暗殺も何もない。

ちょうどこれは殺人鬼向きの舞台だ。確かめてやればいい。

「いいね、ちょっとやる気がでた。さっきまでのお前は道に迷った糞餓鬼そのものだっただぜ」

言われてスツと顔を撫でる。何が変わるものか。

「英雄って輩は皆そうやって知ったような口を利くのかい？」

「だったらどうだって言うんだ？」

詰まらなそうに、しかし男の気配が張り詰めたものになる。本気でめんどくさがっているくせに、それだけで俺の意識は最大級の警鐘を鳴らしている。

「気に入らないってただだよ」

何の気負いもなく一步目を踏み出す。男の右手には釣竿が握られている。左手はポケットに突っ込んだまま。男が左足で踏み込むのであれば目の前のバケツが邪魔になる。狙うのは左後方からの強襲。零から最高速へ瞬時に至る七夜の歩法は四足獣のものだ。故に一步目は『人間』から『獣』へと肉体の働きを変化させる為の動作である。巧妙に偽造された動作は本来人の目には映らない。

だというのに。二歩目で既に最高速に乗った身体を目的の位置へと移動させていた俺は、『人間』のまま俺が移動しただけの距離を離し、釣竿を槍の様に構えている男の姿を見ていた。

下がった男を追うように伸びた俺の右手は、わずかに届かない位置で七ツ夜を掴んだまま空を刺している。

「ほんとに。死にたくなるほど無茶苦茶だな、ランサー」

七夜とはただ殺人の技巧を積み上げただけの集団ではない。文字通り始まりから滅びるその時までその存在を暗殺という命題に解答するだけの機械へと造り替えてきた異常者の群れだ。

だというのに英雄というのはたった一世代でそれを踏み越えるらしい。

男は一瞬眉を跳ね上げ、自分の獲物を一瞥して頬を掻いた。

「………思わず構えちまったか。アサシンにしちゃ上等すぎ

る殺気だ。てめえは一体なんのサーヴァントだ」

「さあね。で、やるのか、やらないのか。だったっけか」

飛び出しナイフをパチリと引っ込ましながら、出来るだけ挑発的に言葉を吐いた。これはもうただの八つ当たり。ランサーも分かっているのだろう。

追撃をためらって悠長に会話なんかしている時点で決まっているようなものだ。

「俺はちよつとお前に興味が出てきたところなんだが——その様子じゃな」

「マスターに首輪をつけられてるのはお互い様か」

違いない、とランサーは楽しげに笑いバケツを掴んで去っていく。あれであの男は次に会えば躊躇無く俺を殺しに来るだろう。ランサーは戦いを忌避したのではなく、戦う必要がなかっただけ。それは戦う者が持つ当然の二面性だ。

だけど、俺が手を止めたのは。

「——ちつ、殺人鬼まで失格かよ」

ならば今の俺はなんなのだろうか。

当然答えなどなかった。

1日目・夜：殺人鬼と槍兵（後書き）

そろそろF a t e勢を書かねばなりません。

書かねばならないのですが、何にも考えてなかったり。
プロットてなあに？

1日目・朝：衛宮士郎の受難（前書き）

なんていうか、ごめんなさい。

1日目・朝：衛宮士郎の受難

障子越しに差し込む朝日に開いた目が眩んだ。

枕元の時計は七時半を少し回ったところで、俺にしては随分と遅い起床だった。

普段であれば朝食が終わっている時間だが、幸いというべきか藤ねえは研修だとかで三日ほど出張に出ている。そのことにまずは胸を撫で下ろし、むくりと布団から起き上がる。

「夏休みとはいえ弛んでるな」

昨日の疲れが取れていない、などという事はあるまい。日課通りの一日を過ごしただけで特別なことはしていないのだから。なんとなく身体が重たい気がしないでもない。

寝すぎたせいだと断じて俺は洗面所へと向かった。

「とりあえずは朝飯だな。食を欠いては何事も始まらない」

ただの独り言。多くの食客を抱えた一時期ならばともかく、今の衛宮邸には俺しかない。だというのに。

「至言ですね。わたしもできればシロウの朝食を食べたい」

これ以上ない笑顔で彼女がそこに居た。

「あれ。え？」

いろんな感情が一緒くたになって思考が像を結ばない。

「おはようございますシロウ」

「あ、うん。おはようセイバー……じゃなくて。なんているんだ？」

「な！ 朝食とシロウの安眠を天秤に掛け、身を切る思いでシロウの安眠を優先したというのに。その詰問は不当です！」

いや、うん。セイバーに食べ物関係と天秤に掛けてもらえるくらい大事に思われてるのは嬉しいんだけど。

おかげで思わず抱きしめそうになった手は宙を彷徨って力なく下ろされた。

「不当って。セイバー、聖杯戦争はもう終わったんだぞ」

そう。セイバーは。アーサー王は聖杯に願った望みは自分のものではないと。やり直しは過去に対する冒涇であると。そう断じてあの丘へと還ったのだ。

「シロウまで一体何を言っているのです？」

だと言うのにセイバーは心底分らない、という顔で俺の顔を覗き込んでいた。

「あーうんうん。そうなるわよねー。士郎、朝ごはん勝手に作っちゃったから。話は食べてからにしましょう？」

居間から顔だけ出して遠坂がおいででしている。

「遠坂、おまえ時計塔の下見に行ったんじゃないの？」

来年、遠坂は時計塔に留学する。事務手続きや住居などの目星をつけておきたいとロンドンに行つてくるとつい先日言われたばかりだ。

勝手に家に上がつてあまつさえ食材を調理したことは追求しない。遠坂だしね。うん。

「衛宮君気付いてないのね。左手、見てみなさいよ」

言われて目をやると三画の文様が腕に刻まれていた。令呪だ。

「いざ空港に向かおうと思つたらわたしもこの通り。慌てて向こうに適当な理由つけてキャンセル入れてそのままこっちに来たの」

確かに遠坂の手にも令呪が見えた。なるほど。わからないけど分かつたような。

「セイバーもいろいろ言いたいことあるんでしょうけど、わたしが作つた朝ごはん冷えちゃうわよ？」

「くつ。リン、その様な言い方は卑怯です。わかりました。話は食後にお茶でも飲みながら、ということだ」

なんだかよく分からないけど、セイバー。それでいいのか。完全に置いて行かれた俺はセイバーに促されて居間へと入る。

「遅かつたなあ、坊主」「おはようございます。今日は随分とゆつくりなのですね、シロウ」「腑抜けているな、まったく」

ライダー、ランサー。そしていけ好かない赤い奴がそれぞれ好き勝手に座っていた。
なんでさ。

1日目・朝：衛宮士郎の受難（後書き）

今回好き勝手すると矛盾を潰すのに苦労することがよく分かりました。

どうなることやら。

1日目・朝：言峰教会へ（前書き）

だんだん何を書いているのか分からなくなってきました。

ご都合主義なんだよ！！と言いつ張れる程度の矛盾だけに収まってくれとよいのですが。

1日目・朝：言峰教会へ

好き勝手に居間に陣取るサーヴァント。出来立てらしく、遠坂の作った朝食は湯気を立てていた。

「てーかランサー。つまみ食いはよせ。」

見咎めたセイバーが食って掛かるのをニヤつきながらなだめている。セイバーをからかって遊ぶのはいいけど食に関する事だけは避けたほうがいいと思うぞランサー。死んじゃうから。

「……………じゃなくて。」

「なんでさ」

別に解答が欲しかったわけじゃない。欲しいけどそれは食事の後でって遠坂も言ってたし。だというのに。

「何を言っている。座に戻ったはずのセイバーがそこに居るのだ。我々がここに居て何かおかしい事があるかね？」

皮肉屋がわざわざ小馬鹿にしたように応えた。絶対に俺はこんな風にはなりたくない。

「そういう意味じゃない。だいたい何だってこんなことになってるんだ」

「尋ねれば答えが与えられると思っているならお前はまだまだだ。いくら成長したかと思えばその程度か。まあ、期待はしていなかったがね」

口を開けば口論になる。アーチャーがわざとやっているなら俺は黙るしかない。

何かの間違いでもこうして皆と食事ができるのだ。嫌な雰囲気にはしたくなかった。

「アンタもいちいち喧嘩を売らない。今日は忙しくなるわよ。さっさと食べちゃいましょう」

「それには同意です。わたしは早く状況を確認しておきたい」

遠坂の取り成しにセイバーが同意する。

もともとセイバーは既に箸を片手に目を輝かせているのだから、言葉通りに受け取っていいものか。

なんにしる今は朝食を楽しもう。卓が埋まるほどの面子で食事をするのは本当に久しぶりなのだから。

「で、一体どうなってるんだ、遠坂」

騒がしい朝食を終え、食後のお茶を啜りながら俺はそう切りだした。

アーチャーは街を巡回に行ったようだ。遠坂の言葉はここに居な

くてもヤツに届くのだからここに居る必要はないのだろう。

「推測はできるけれど——セイバー。貴方昨日の記憶はある？」

湯のみの暖かさを楽しむようにしながら遠坂。

「昨日、ですか。家に戻るとシロウが既に眠っていたようなので道場で少し身体を動かした後私もすぐに眠りましたが」

遠くを見るような目でセイバーがそう応えた。

「その前は？ 貴方が一人で家を空けたのはなぜ？」

「それは——士郎は午後からバイトに家を空ける、とのことでしたから街を回って暇を潰してただけで」

何かを必死に思い出すような顔に俺は違和感を覚えた。だって昨日の事なんか難しく考えなくたって思い出せるのだから。

ライダーの表情が険しい。ランサーは変わらず楽しげにしている。

「そうなの、衛宮君？」

「ああ。俺は昨日はバイトだったけど」

そう俺はセイバーの言うとおり昨日はバイトで家を空けていた。だけど。

「この通り。私の記憶に齟齬などありませんよ、リン」

胸を張ってみせるセイバーは顔色がよくない。

「ふうん。じゃあ、なんでセイバーは夜遅くに戻ってきたの？ 衛

宮君は夜更かしする方じゃないと思うけど、貴方が晩御飯を食べ損なうなんておかしくはない？」

「それはっ、確かにそうですが。私は……………」

「まあいいわ。貴方たちはどうなの？」

遠坂は押し黙ってしまったセイバーからライダーとランサーへ矛先を変える。

「わたしは昨日は一日中バイト先の骨董屋にいましたが——」ここに戻ると私の部屋はありませんでしたし、桜の姿も見当たりません。これは、そういうことなのでしょう」

「俺はなんとなく俺の記憶に齟齬があるってのは理解してる。何しろうちのマスターは俺の顔を見るなり警察に電話しようとしたからな」

ライダーは不安げに。ランサーは肩に哀愁を漂わせてそう語る。

ライダーはともかくランサーは不憫だ。

「補足しておく、アーチャーは勝手に紅茶なんか淹れてたから後ろからガンド喰らわしてやったわ」

不憫な人はもう一人いたようだ。

「で、遠坂はどういう結論に達したんだ？」

「これからカレンと意見を交換しないといけないとは思っただけ。ああ、カレンって言うのは綺礼の後釜よ。ランサーのマスターって事になるのかしら。貴方たちが現在に存在するという矛盾を偽の記憶で塗りつぶしている何かがあるって事でしょうね。」

ランサーがわざわざここに来たのもカレンは何か知ってるって事でしょし」

違う？ と問う遠坂に、ランサーはうなずいた。

「私はどうすれば？」

力ないセイバーの問いに遠坂は目を細めながら答える。

「居ないはずのものがここに居るっていうのは世界にとって都合が悪いの。貴方たちがここに存在し続けようと思ったらその偽の記憶を信じなければならぬ。いかに霊格の高いサーヴァントとはいえ、世界の修正力に単独で逆らうのは分が悪い。誰かが虚偽で後押ししてくれるならそれに乗っておくべきでしょうね」

ま、さつさと消えたいならば全力で齟齬を否定すればいいのだけど。と意地悪そうに付け加える。

「わたしは消えるつもりはない。まだ、一人にするにはシロウは危なっかしい」

「わたしも消えるなら桜の顔ぐらいは見てからにしたいものです」
「俺はなんというか。首輪をつけられてしまったからな」

三者三様に答えるが、積極的に消えるつもりはないらしい。

「それじゃ、これから言峰教会に行くってことでいいのか？」

「ええ。皆に異存がなければそういうことになるわね」

皆、と言っているくせに、遠坂はライダーだけを見ている。

ピクリとも表情を変えなかったライダーは根負けしたように小さく笑う。

「リンには勝てませんね。わたしは桜に会っておきたい。同道しなくても構わないでしょうか？」

「貴女ならそういうと思ったわ。いいわよ。後で結論は聞かせてあげる」

妹を一番にしてくれるこの存在が遠坂にとってどれだけ眩しく、有難いのか。俺は知っている。

戸締りをして間桐邸へ向かったライダーを見送り、俺たちは言峰教会へと向かった。

1日目・朝：言峰教会へ（後書き）

そろそろ前置き編の終わりが見えてきました。前置きが終わった後に何が起こるのか。

ほんとどうしよう。

1日目・夜：路地裏同盟2（前書き）

ロアさんが嫌いなわけじゃないんです。
ネタっぽいのがいけないんです。

1日目・夜：路地裏同盟2

「それでお互い引き下がったのですね、殺人鬼」

拠点へと戻ってきた殺人鬼は、ランサーと遭遇したと切りだした。事態に流動性があることは理解していたが早すぎる。殺人鬼が引き下がったのは意外だが、幸運でもあった。

「ああ。俺はまだ方針を聞いてなかったからな。自分を曲げて飼われる選択をしたというのに事が成らないようじゃ救われない」

その言葉をまるつきり信用するわけではなかったが、この男が作戦に従う意志は確認できた。

「賢明です。我々は全てのサーヴァントを打倒し、かつその後に取りを討伐しなければならない。予想される困難を考えれば貴方という駒を今失うことは避けたい。単独で当たれば貴方を失う可能性もあったわけですから」

「そう慎重になるほど俺達の戦力は低くないと思うけどね」

殺人鬼の言葉は一面では正しい。サーヴァント2体、吸血鬼2体、元ヴェステル弦楯騎士団団長、そして極上の使い魔。有する戦力は絶大、と言って差し支えないだろう。ミハエルさん？ 彼は路地裏でお留守番です。さつきにやられちゃうような雑魚ではとてもとても。

もつとも数というアドバンテージを最大限活かせる場合は、という条件がつく。なにしろこの好戦的な男が引き下がるほどの敵が少なくとも5人いるのだ。

「ええ。卑屈になる必要はないでしょうが。殺人鬼、貴方はそのサーヴァントを打倒できた？」

一切遠慮なく切り込む。殺人鬼の性格を考えれば気を回すほど余計に気分を害すだろう。

「倒すには倒せただろうさ。当然ここに俺は居なかっただろうけどな——レン、その目はやめろ。不快だ」

この解答も予想通り。使い魔の気遣うような視線を殺人鬼が咎める。

リーズがしたり顔なのは戦う者特有の理解だろう。

「いいでしょう。ですが我々の目的を達成するためには誰一人欠く事が出来ないことを忘れないように。加えて私の分割思考はリーズを支えるために劣化していますしタタリの現出によりいつ吸血衝動に飲まれるかも分からない。キャスターはこの作戦の要でもある。令呪もその後押しで使い切る予定ですから、一つも無駄には出来ない。レンを失えば貴方が存在できなくなることから遠慮なく前面に出て戦闘をすることができるのは貴方とリーズ、さつきのみ、と言うことになる」

その先は言うまでもないでしょう。決定打を持たない殺人鬼に成り立ての吸血鬼。リーズの所有するガマリエルも対吸血鬼の殲滅に特化した概念武装。サーヴァントの霊核を傷つけられるかは怪しいところだ。

そもそも英霊などというモノが吸血種に対して効果的な武装を持ち合わせていないとは考えにくい。

殺人鬼からは反論がない。キャスター、レン、さつきもそれぞれ

沈黙を保っている。

反論は意外なところから来た。

「なあ、シオン。君は少し考えすぎだ。君が言ったんじゃないか。数で当たるべきだ、と」

「貴女は考えなさすぎです、リーズ」

私の分割思考を二つも潰しておいて、なんだってこう行き当たりばったりなのだろうか。

「全くもってそちらのお嬢さんの言うとおりだよ、シオン。考える、というのは休むに似ている、とはこの国の言葉じゃなかったかな？」

タタリ、それは限定条件にわたしが馬鹿である必要があるのですが、暗にわたしを馬鹿にしているのですか？

「等価交換、というのは錬金術師の原則じゃなかったかしら。望みを叶えたいというのにリスクは負いたくないなんて、そこまで夢見がちじゃなくてよ」

回避できるリスクは回避すべきでしょうに。使い魔、夢見がちなのは貴女の方だ。

「そうそう、友達のためならあたしだって頑張っちゃうんだから」

さつき、頑張っても世の中にはどうにもならないことがあるんですよ。

まったく、今日まで路地裏同盟が成立していたのが不思議ですらある楽観主義だ。だと言うのに悪い気はしない。どこまでわたしの性能を劣化させれば気が済むのか。

「さて、錬金術師。たしか君の役目は俺達の意見を総括し最良の手を見出すことだった、と俺は記憶しているが」

性悪そうな殺人鬼の言葉。いいでしょう。そこまで言うのなら従いましょう。

「ですが、わたしは貴方たちを失いたくない。ああキャスター、貴方には最後にはくたばってもらいますが」

「人使いの荒いことだ。何、気にすることはない。君たちに目的があるように私にも目的がある。遠慮なく使い潰したまえ。うまく切り抜けて見せよう」

タタリに気を回されるとは堕ちたものだ。

「ですが街の哨戒はリーズと殺人鬼、さつきに任せます。遭遇し次第後衛もそこに向かう。流石に三人を相手に優位に立ちまわれるような怪物はいないと願いましょう」

錬金術師が願う、だなんて。馬鹿げているが満足な結論だった。なにしろこれは聖杯を求める戦い。少しぐらいロマンを追っても許されるだろう。

「それじゃ早速行動に移るか。正直あんな奴等と戦えるなんて心が躍って仕方がない」

気を逸らせる殺人鬼に呆れた様な顔を作っているリーズだが、彼女もそれを望んでいるのだとわたしには察せた。

路地裏同盟の戦争が始まるうとしている。

最後に笑える結末を描き出す。それがわたしの役割だ。

1日目・夜：路地裏同盟2（後書き）

路地裏同盟の行動はこれで定まりました。
戦力が集りすぎな気もありますが、なんとかな—れ—。

1日目・昼：蒼崎の煩悶（前書き）

ほったらかすと空気になっちゃうのはサーヴァントが居ないせい
だと思っんです。

橙子さんめ、仙人になりたいなんて言うから引き籠もり紛いの行動原理に支配されることになる。

・・・・・・純粹に僕の力不足ですすみません。

1日目・昼：蒼崎の煩悶

久々のドライブと割り切って、整備を終えたDB7を引つ張り出したというのに、目的地に着くなり私のテンションはだだ下がりだった。大気中に分散する大源の密度は既に自然現象の領域を超えている。

蒼崎が抱える霊地だってこれほどには歪んじやいない。

「で、これは一体何事なんだ、トウコ」

恐らくは魔力的な方向からではなく、動物的な感性からこの異常を察したらしい式は真つ当な荒事にはならない事に不満と期待をない交ぜにしつつ、とりあえずは私の行き当たりばつたりに対して嫌味を言うことにしたようだ。

「私に聞くな。チツ、こんなことになっているとはな。そうか、件の冬木とはこの事だったか」

限りなく無色に近い魔力が流れるでもなく、ただそこに分散している様は明らかに異常だ。何者かの介入があると考えるべきだろう。まったく。私が抱える案件と合致しすぎて最悪な気分だ。

路肩に車を寄せ、ハザードを焚く。

「これは聞きかじった程度の事だがな、この地には聖杯、というものがあらしい。万能の願望機としてのそれだ」

「魔術師ってのはもうちょっと現実主義者だと思っていただけだな」

式のこういう察しの良さは私の好むところだ。

「逸るな。魔術的な理屈で矛盾さえなければ、夢見勝ちだろうが御伽噺だろうが追い求め、解析し、研究の足しとするのが魔術師の本分だ。そしてそれなりに信頼の置ける精度の魔術師達が、あるいはそこで系譜を絶やすことになるリスクを背負ってでも追うべき、と判断したモノがここにあるということになる」

聖杯戦争。あくまで知識として知る程度ではあるものの、根源の渦へ至ろうと途方もない年月を重ねてきた者達が、その血の結晶たる魔術刻印を背負ったまま命の取り合いをする。魔術刻印を失ってしまったえばそれまでの過程を大きく欠損するというのに。

魔術師としての正気を保ったまま、それを是とする者がいるというのだからこの聖杯はまるっきりのゴミではあるまい。

「それを追いかける、なんて言い出したら流石にオレは降りるぜ」

「馬鹿を言え。私は既に魔術師の本分を捨てている。あるいは時計塔時代なら考えたかも知れないが、生憎と願望機に縋らなければならぬほど私は非凡ではなかった」

式が冗談を口にするのは珍しい。私という生き物をそれなりに理解しているのだから、シートベルトに伸びた手も狂言の一部と取るべきだろう。

「じゃあ、引き返すことにするのか？」

「そうしたいのは山々だがな。忌々しい事に手数は足りている。少なくとも面倒ごとに巻き込もうとした依頼人に文句ぐらいは言わせて貰う」

怪訝な顔をしている式に、指で目の前の家を指差してみせる。

「そこ。我々の目的地。非常識にも私に声をかけてきた依頼人の住

居だ」

「魔術師の住居って――」

「みなまで言うな」

心底呆れた、という顔の式を遮って止める。言いたいことは分かっている。

ここまで条件がそろえばもう依頼人がこっち側の人間だと言うことは事は確定している。そして魔術師の拠点というのは要塞と同義だ。そこに魔術師蒼崎橙子を呼び込むのだ。あちらも生半な覚悟ではなからう。

二流だったら蹴っ飛ばしてやる。

「そういうわけで、行くぞ。式」

「最近お前はまともになったと思ってたが、撤回する。やっぱりお前は馬鹿だよ、トウコ」

ハザードを消し、軽くアクセルを踏み込んで民家の駐車場に車を頭から突っ込む。

街を覆う無色の魔力とは全くの別物、明らかに意志と目的を持って付与された魔力がこの家にはある。

エンジンを切ってしまった私に最早苦言を呈する気力も失せたらしく、式は大人しく車を降りた。

「まあ見ている。資材調達で消費した資金ぐらいは回収する」

計ったようなタイミングで勝手口が開き、ツインテールの少女がゴミ袋を両手に家から飛び出してきた。

こっちを見て今気付いた、というような顔で歩み寄ってくる。

「あの、ウチに何か御用ですか？」

「ああ。依頼を受けてきた者だ。蒼崎橙子という。そっちは助手だ」

茶番も良いところ。それなり以上の魔力をこの少女からは感じる。演技力の無さはこの際目を瞑ろう。

「ああ、やつときてくれたんですね！——つと。あたしはお使いの途中でした。そのまま玄関から入っていただければシオ、じゃなくて家の者が対応すると思いますのでどうぞ」

ゴミ袋を両手にそのまま歩道へと歩いていく少女を視線で確認し、式を促す。

「おいトウコ。あれ、人間じゃないぞ」

「そのようだな。うまく隠しているがヒトの血の匂いがした」

眉を顰めている式をひっぱりそのまま玄関へと向かう。

「いや、だから血の匂いが——ああ、もう。どうしてお前はそんなんだ」

「ごちゃごちゃと何か式が言っているが最早そんな事はどうでもいい。吸血鬼を飼い、あまつさえ一流、と呼んで差し支えの無い魔術付加を家に施している者。」

その目的ぐらいは目にしておくべきだろう。それが虎穴であったところで、覗き込みたい、という衝動を抑えられるほど私は探求者を辞めていないのだ。

1日目・昼：蒼崎の煩悶（後書き）

お膳立てその1。いい加減引き伸ばし臭が鼻につき始めた頃かと思いますがもう少し、もう少しお付き合いくださいますよう。

だってまだ何も考えてないんだもん。

1日目・昼：蒼崎の煩悶2（前書き）

橙子さんの乙女力は磨耗したのではなく、密かに隠匿されているのだと信じている。信じているのであって、事実かどうかは問題ではなのだ。

1日目・昼：蒼崎の煩悶2

解ってはいたさ。外見はどう見たって築20年にも満たない一般的な民家だったし、魔術の痕跡もそう古いものではなかった。その癖、住所を知り目的を持って踏み入った私ですら招かれていなければ知覚できたか怪しい程の精度で隠匿された敷地。

以上のことから生半の腕ではない魔術師が必要に駆られてここを拠点としたということぐらいはそう。解っていた。

「で、貴様は一体なんだ。吸血鬼」

ひと目見て判るほどに濃い血の匂いが。そして隠す気のない魔力が。この男を魔術師上がり之死徒であると証明している。そして厄介な事に魔術師上がり、という奴は目的を持ってその身を死徒に落とすパターンが多い。研鑽を積んだ魔術が戦闘向きとは限らないが、容易い相手ではない。

「それは名を名乗れ、という事かな？ 残念だが私は名を明かす事を許されていないのだよ。よしんば先に君が名乗っていたとしても、だ」

言外にこっちの名を要求してくる。

「さっき外に飛び出してきた奴には名乗ったんだがな。そう何度も名を聞かれるのは面白くない。許されていない、と言ったな。そいつの所にさつさと案内しろ」

「ふむ。どうやらお急ぎの様子。三下ごときには構っていられないという事か。嘆かわしい。たださえ娯楽は少ないというのに、いつまで詰まらない劇を眺めていればいいのやら」

持つて回った言葉に内容などない。ただ暇つぶしに付き合えなどと、冗談にしても性質が悪い。

「それはそっちの都合だろう。オレはそんな事知らない」

案の定式が暴発した。既にその手にはナイフが握られている。目の前の道化がどうなろうと知った事ではないが、私の目的に差し障る。

「私も暢気な方ではないが、ツレはそれ以上だ。娯楽が欲しければ主に請え」

「これは道理だ。その眼を相手に我欲を通せるほど私も無茶ではない。なによりいい加減主の堪忍袋が限界だろう。粗末な屋敷に客を招くなど言語道断だが致し方ない。この粗雑さをどうにかするため君を呼んだのだからね」

ついて来い、と言う事なのだろう。あっさりと男は身を翻し屋敷の奥へと滑るように進んでいく。

「おい、トウコ」

「お前の眼はひと目で見抜けるような代物じゃないよ、式。なおさら帰る訳には行かなくなっただな」

直死の魔眼を知る者。少なくともそれを見たことがある、という事か。

好奇心に駆られて動く者は蒙昧だが、それなくして人間とは呼べない。

男の背を追って、私と式はその部屋へと踏み入った。

そこはほとんど魔窟、と言って構わない部屋だった。促されるままソファ―に腰掛けたのは彼我の戦力差が尋常ではなかったからだ。

ドアの脇に控える長身の女――多分女だろう――と、先ほどの道化。どうにも逃げ場がない。

加えて主人らしき人物の横には規格外の使い魔が同席している。

「まずはご足労頂けた事に感謝します、蒼崎橙子。キャスターの非礼も詫びておきます」

対面に腰掛けている少女が丁寧に礼を取る。当然だ。

呼びつけた拳句、力の差を見せ付けたまま対話に臨む非礼など、その礼が無ければ私はブチ切れているところだ。

「全くだ。たかが家の改装に。それも一時的に拠点とするだけの代物のために私を呼びつけたんだ。それなりの対価は要求させてもらうぞ、シオン」エルナム「アトラシア」

そう、驚くべき事にこの少女はかつてアトラシアの称号を得、アトラス院の院長候補にまで上り詰めたという。封印指定を受け半ば隠居じみた生活をしている私の耳にもその名は届いていた。

「生憎ですが、アトラシアの号は返上しました。今は二つのキョウウカイから追われる身です。封印指定の貴方に声をかけたのもその立

場故と理解して頂きたい」

「判らないな。お前たちの望みは家の改築だろう。そこら辺の大工を雇えばいいじゃないか」

わざわざ魔術師だと判っている私を呼びつける意味がわからない。私にしたって大概その手の仕事はデザインまでを手がけるだけで、あとは丸投げする事が多い。

「なんといいいますか。私を含めこの家には変わり者が多い。一般人に迷惑は掛けたくない」

「魔術師なら迷惑を掛けてもいいと？ 冗談じゃないぞ」

「それは冬木という名と伝手もなく貴方に依頼を出した時点でそこらはこちらの状況を織り込んでいるものだ判断したまでです。気付かなかったのは私の計算違いですが、そもそもそちらの手落ちでしょう。仮にも赤の称号を受けた魔術師がそんな事に気付かないとは――」

「失礼します。お茶をお持ちしました」

軽いノックの後学生服の青年と先ほどのツインテールの少女が入室してきた。

少女はドアの横へ。青年は淀みない所作でテーブルに紅茶とケーキを並べていく。

勢いを殺されたシオンは不満げに青年を睨んでいる。

「へえ。お前おもしろいな」

隣の式から嫌な気配がする。話の核心にも至っていないというのに乱闘はごめんだ。

一瞬剣呑な気配を噴出した青年だが、あっさりと引っ込め代わり

に、とでもいうように式の眼を覗き込む。

「お褒めに預かり光栄です。運があればあるいはお誘いに乗れるかもしれません」

式はそれで満足したらしい。あつさりと目の前の紅茶に口をつけた。

「ちよつと志貴、わたしにはケーキ無いの？」

「生憎とこの家には贅沢品なんてそうあるものじゃない。この場合当然お客様優先だろう、レン？」

「それは、そうだけど」

「・・・・・・食べるか？」

式がショートケーキの乗った皿をレンと呼ばれた少女へと押しやった。

猫に餌を遣るような気軽さと期待を込めた表情の式にため息がでる。これではあちらを笑えない。

レンは困ったようにシオンとケーキの間で視線を彷徨わせ、

「レン、貴女は一体何を・・・・・・構いません。頂きなさい。お礼は言うのですよ？」

子供に諭すようなシオンの言葉。使い魔と主にしては様子がおかしい。

「わ、わかってるわよ。あの、ありがとう、シキ」

堪えかねたように笑い声がドアの側で上がる。

「俺のマスターを餌付けしないでくれないか？ これでも歓心を得ておかないといつ首を切られるか判らない身の上だね」

「使い魔に飼われるなんて、おかしい奴だなお前」

同音の名前を持つ者達は既に戯言を交わしている。

なんだこれは。

「全くあなたたちは緊張感というものが——大変失礼しました」

取り繕うようにシオンが威儀を正すが、最早これは手遅れだろう。

「死徒を使役し、極上の使い魔を侍らせる錬金術師がどれほどの者かと思ったが——」

案の定使役、という言葉にシオンの眉が釣りあがった。

「さつきもリーズもわたしの大切な仲間だ。その発言は——」

正しく仲間の為に怒れる。面白い、と思う。

「——そういう関係ではないのだな、お前たちは。いいだろう、家の改装の件は請け負う。それ以上の面倒ごとは……報酬と気分次第で考えてやってもいい。何しろ私を呼んだのだ。そのつもりはあるのだろうか？」

一瞬で自失から立ち直ったシオンは頬を掻き、

「話が早くて助かります。ええ、今はその条件で十分です。市内のホテルを予約しておきました。お使い頂ければ幸いです」

言ってシオンはホテルの地図を差し出してきた。本来なら他人の用意した寢床に陣取るなど下策もいいところだが、

「有難く使わせてもらう事にする。明日にでも下見に来よう」

こういう気分になれてしまったのなら私の負けだろう。

クソ、式の少女らしい表情など、そうそう見れるものではない。手元にカメラが無かったのが惜しまれる。

ホテルへと向かう道すがら、私がインスタントカメラを購入したのは言うまでも無いことだ。

1日目・昼：蒼崎の煩悶2（後書き）

どこまでやれば橙子さんの魔術師、という仮面を剥ぎ取れるのか。式は面白ければだいたい自分でどうにかできる範疇なら好き勝手にしてくれそうなのでいいのですが。

1日目・昼：タタリというモノ（前書き）

そろそろプロットを書いておかないと、立てた設定で行き詰りそうです。

場合によっては修正することになってしまうかもしれません。

1日目・昼：タタリというモノ

言峰教会。この場所は言峰綺礼がいなくなった今でも苦手にして
いる場所の一つだ。

ギギイ、と軋む扉を開きながら足を踏み入れたそこは、清浄なく
せにどうにも違和感がひどい場所だった。

「遅かったですね。こんな簡単なお使いも満足にこなせないから貴
方は駄犬なのです」

開口一番、カレンの口からひどい言葉が飛び出した。
黙っていれば良いのに、ランサーは猛然と口を開く。

「ちゃんとレイラインで伝えたる。文句があるならのんびり朝飯食
つてたこいつらに言え」

「あら、その朝食に同席しておきながら随分な言い訳ですね、ラン
サー」

案の定言葉に詰まったランサーは、不機嫌そうに座席に腰を下ろ
した。

「で、これどーなってるのよ。カレン。聖杯戦争が始まっているの
は確かなの？」

「とても管理者の言葉とは思えませんが。貴女の目は節穴ですか？」

にらみ合う二人に置いて行かれた格好の俺は困ったようにセイバ
ーを見下ろした。

セイバーと目が合う。困っているのはセイバーも一緒らしい。

女の子を矢面に立たせるのは男としてどうかと思う。恐る恐る二

人の女怪に声を掛ける。

「なあカレン、大聖杯は確かに破壊されたんだよな？　なんで聖杯戦争が起きてるんだ？」

あつさりとカレンは遠坂から視線を切ってこちらに向き直る。

「衛宮士郎の質問こそがこの場では正鵠を射ています。仕方が無いので管理者の質問にも答えますがどちらもイエスです。より正確には聖杯戦争が再生されている、と言うべきでしょうが」

「再生、ってどういうことだよ。じゃあここにいるセイバー達は誰かが動かしているって言うのか？」

「言葉の通りです。そもそも英霊、というものは座に登録された英雄、という記録を現世に再生しているモノに過ぎない。大聖杯を仮想的に構築し、現実には侵食させた者は確かにいるでしょうが、第5次聖杯戦争で再生された英霊達をオリジナル、というのなら、今ここにいる英霊達もまたオリジナルでしょう」

言ってる事がわからない。遠坂はなるほどねー、なんて呟いている。

「つまりね、セイバー達が現れたのは、第5次聖杯戦争時の聖杯を再生する、という行為の一環なのよ。どこの馬鹿がどんな方法でそんな事をしたのかわからないけれど」

「じゃ、バーサーカーやアサシン、キャスターもいるってことか」

「それはどうかしら。ランサー達の記憶と現実をすり合わせて齟齬が最小に収まる範囲でならありえると思うけど。朝言ったでしょ？　そもそもマスターであったものが存在しないのにどうやってサーヴァントが現界するのよ」

そうか。葛木先生もイリヤも既に故人だ。

「それより知っているんでしょ？」

と遠坂はカレンへと向きなおる。

「ええ。恐らく管理者にも協会経由で連絡が来るとは思いますが、タタリ、と呼ばれる死徒がこの街で発生する事を確認した、とアトラス院から両キョウカイへ連絡がありました」

「発生？ 死徒って吸血鬼の事だよな？」

もう何を言ってるのかわからない。

「その認識で構わないわ。つまり私達はその死徒を打倒すればこの状況を打破できる、ってことでしょ？ サーヴァントをぶつけければあっさり終わる話じゃない」

遠坂の様子を見るに大事ではないようだ。

「なるほど。仮にも二十七祖の第四位を大師父と仰ぐくせに第十三位『ワラキアの夜』はご存知ないと。その程度で済む話なら、さつさとわたしがその犬をお使いに出しています」

犬、と言われることは諦めたのかランサーはあらぬ方向を向いたまま我関せずを貫いている。

遠坂の顔が笑顔のまま固まった。

「その、ワラキアだかタタリだかつて言うのはどんな奴なんだ？」
「奴、という言葉に答える術をわたしは持ちません。その能力は分類するのであれば固有結界。人々の不安や噂を扇動し、その心象を

具現化するだけの現象となったモノです。故に現れた現象を打破することが出来ても、タタリ自体を打破する術は存在しない、と言っても過言ではないでしょう」

「そいつは今大聖杯の形を取ってるんだろう？ また壊してやればいいじゃないか」

「……わたしの話聞いていましたか、衛宮士郎？ 本体が現象に過ぎないと言う事は、現れたものを壊した側から再生できる、と言う事です。あちらが現象としての特性を最大限利用して大源を利用している以上、現れるたびに破壊してはこちらの魔力が底を突くでしょう」

なるほど、じゃどうするんだ俺達。

「セカンドオーナーとしての意地もあるでしょうから教会から騎士団を派遣しよう、という話には返事を出してはいませんが、埋葬機関からは一名代行者が送られてくる事は既に決定しています」

どうします？ と、カレンは遠坂に話を振った。

「待ちなさい、代行者が送られてくるってどういうことよ？ わたしはそんな話聞いてないわ」

遠坂の言葉の端々には嫌悪感が溢れている。

カレンが眉をひそめる。

「それはそうでしょう。わたしもそういうことになった、という業務連絡を受けただけでもそもそも決定に介入する権利など与えられていません。それとも埋葬機関の在り方まで説明しなければなりませんか？ 騎士団の派遣の話は彼らの好意によるものです。かつてタタリという現象に対し一つの異端審問騎士団を投入し壊滅させられた過去を考えれば破格の好意だと言えるのですよ？ 東の果ての神

も信じない輩の為に死ぬと分かって盾を買って出てもいい、と言ってくれているのですから」

カレンの口調が普段より鋭い。悪し様に言いながらも他人に古巣を悪く言われるのは気に入らないらしい。

「それは――」

押し黙ってしまう遠坂の内心は分からない。だけど。

「……その聖堂騎士団だっけ？ そっちはやっぱり断ろう」

「それは何故ですか、衛宮士郎」

裏にどんな思惑があるのかは関係ない。ただ。

「その人達を盾に残ったんじゃ、俺は十年前の大災害を繰り返す事になる」

俺はあの災害でいろんなものを犠牲に残った。そうじゃない、って言ってくれる人もいるけど俺はやっぱり間違ってると思う。

「では、これをどう対処すると？」

「そんなのは知らない。でも絶対に犠牲はださない」

アーチャーが居たらきつと馬鹿にされる。でも俺はそうしたい、と思った。

この気持ちは否定させない。

「わたしはシロウの剣だ。無茶にも付き合いましょう。少しは自重して欲しいのですが」

「すまない、セイバー」

一人ではない事が心強い。だというのに。

「雑種め。妄言もほどほどにせよ」

尊大で傲慢な声が教会の奥から降ってきた。

1日目・昼：タタリというモノ（後書き）

ツッコミどころが多すぎる今回。原作設定に対する不理解が露見しそうです。

1日目・昼：黄金の王（前書き）

彼が慢心してるのは本気出すと世界が詰まらなくなってしまうからだと思います。

1日目・昼：黄金の王

「雑種め。妄言もほどほどにせよ」

非才な身にも容易く感じ取れるほどの魔力を滾らせ、黄金の男はこの場にある全てを睥睨していた。

なんで教会にいるのかなんて聞ける気配じゃない。

「まさかあんたまでいるなんてな、ギルガメッシュ」

「下らぬ話を続けているだけなら聞き逃してやる寛大さはぐらいは持ち合わせているのだがな。程度を弁えよ雑種。この下らん茶番を決断一つで動かせる立場にありながらその口から漏れるのは現実味のない妄言ばかりではないか。王たる我が付き合っただ。それなりのモノは見せてもらおう」

講壇へと寄りかかりながら黄金の王は訳の分からない事を言う。

「一体何を言ってるんだ？」

「なるほど、この世界でも雑種は雑種であつたか。許せ。馬鹿を相手に言葉を選ぶなどという事は我の人生の中でもそうないのだ」

馬鹿にされてるという事はよくわかった。

「ねえギルガメッシュ、土郎の決断一つでってどういうことよ？」

言葉が出ない俺に代わり遠坂が口を開く。

「お前たちはそこにいる雑種の決断を無碍にはすまいよ。既にこの面子での聖杯戦争など凡そ筋道が決まっている。結論が見えた話など眺めていても面白くない」

「確かに士郎がそうしたい、って言うなら私達は考えるけど……」

遠坂が言葉に詰まる。遠坂とはそれなり以上の仲になれたと思っているし、カレンにしる大事な後輩に違いない。簡単に敵対することなんて出来ない。

そっか、そういうことが。

「敵同士である、っていう前提がないと聖杯戦争は機能しない、って言いたいのか？」

「……雑種、私の話を聞いて——そうであつたな。貴様は雑種故その蒙昧さは許そう。聖杯戦争はきちんと起きている。ただ、我はこの聖杯戦争に価値を感じぬ、と言っているのだ」

自分を中心に世界が回っている、と思っている人はやっぱりちょっと違うな、なんて半ば現実逃避気味に思考が泳ぐ。ここまで当然のように馬鹿にされては反論する気力もない。

「……まって、じゃ貴方は聖杯戦争に参加する気でいたのね？」

「無論だ。いかに贋作であろうと聖杯が聖杯戦争の摂理に擬えて我等を呼んだのだ。ならば我々は聖杯戦争をするべくしてここにある、という事になる。再三言っているがな、我は結末の見える聖杯戦争に興味はない。全てのサーヴァントがここに集っているならさつさと皆殺しにして座に還るつもりだった」

なんでもない事のようにギルガメッシュはそう言った。確かにこ

の男の力ならそう難しくないだろうと思う。

「ギルガメツシュ、わたしを容易く打ち破れると思わぬことだ」

ざっ、と瞬時に武装したセイバーが俺を庇うように前に出た。

「あの、セイバーさん？」

「シロウ、なにをばけっとしているのです、あの男の言葉を聞いたでしょう？」

いや、確かに聞きましたけど。

呆れたような視線が一身に注がれている事に気付いていないのか、セイバー。

「だった、って事は今はそうじゃないって事よね、ギルガメツシュ」
「然り。この場にいる英霊はわずかに2体。時臣の娘がいるならあの贗作者もいるだろうな。それで3体か」

「ライダーも確認しているわ。後は召喚者が既に行かないからなのか、姿を見ていないけれど——ちょっと待って、ランサーはなんでカレンのサーヴァントなんかやってるの？」

カレンは第5次聖杯戦争の参加者どころか、そのとき日本にさえ居なかっただろう。

なるほど、召喚者の有無がサーヴァントの存在を分けるならランサーがそこに居るのはおかしい。

「随分今更だな。金ピカとセイバーが突っ込まねえって事はそういう事だろう、って思ってたんだが」

「なるほど、そういうことか。我にせよ同じことだ。第5次聖杯戦争の聖杯を再生しようとしたのなら、我を呼び出す必要がない。そ

もそも我は受肉していたのだからな。セイバー、ランサー。貴様等が掴まされた記憶で我はどうなっていた？」

「……………子供でした」「……………釣りの邪魔をしやがった」

嫌な事を思い出した、という顔で二人が小さく呟いた。ギルガメツシユは愉快そうに顔を歪める。

「認めたくはないが同じ記憶を掴まされたようだな。サーヴァント側の記録では我とこの犬はこの性悪に飼われていたのだ。それによるものだろう。しかしそうなる则不明なサーヴァントは3体。アサシン、キャスター、バーサーカーか」

「何をそんなに悩んでるんだ？」

「知れたこと。貴様等が死ぬか生きるかのラインをのた打ち回るには敵がいささか少ないと思つてな。我直々に敵を買つて出てやつてもよいのだが、それなり以上の役所でなければ我は満足せぬ」

「なんで俺達が他のサーヴァントと戦う事になつてるんだよ」

俺が呆れたように言い返すと、ギルガメツシユは今度こそ本当に馬鹿にしきつた表情で俺を睨んだ。

「ククク、マスターとは聖杯を欲する者にのみ与えられる特権だ。新たにサーヴァントを呼ぶ者があるなら彼等は等しく貴様の敵だ。なにしろ聖杯は悪意に満ちているからな」

そうか。誰かが聖杯を欲するなら、俺はそれを止めなくちゃならない。聖杯だけを相手にしている場合ではない。

これだから雑種はおもしろい、とギルガメツシユは大笑しながら教会の奥へと去っていく。

「精々楽しませろ雑種。あまりに道化ていると、捨てるぞ」

なぜか俺にはその言葉が激励に聞こえてならなかった。

1日目・昼：黄金の王（後書き）

なんだかなー。

1日目・夕方：殺意と二人（前書き）

一日空きました。

物語は何時までも一日目だし、一体なんなんだ。

1日目・夕方：殺意と二人

オレは不機嫌を隠さずに手元のナイフを弄っている。

隣で運転中のトウコも不機嫌な顔をしている。眼鏡をしていないから顔はそもそも不機嫌なのだが、気配もまた不機嫌そうだった。さつき会った不思議な連中も道路の渋滞も関係ない。

「なあ、トウコ」

「知らない振りをしてる。私だって我慢してるんだぞ」

そんな事は分かってる。だけどどうにも気に入らない事っていうのはあるんだ。

殺気を向けられて気が昂ぶらないほどオレは真っ当に人間やれてない。

「そうは言うけど、完全に敵視されてるぞ。殺気がひどい」

「じゃあ遊んでくるか？ お前が勝手に突っ走ってくたばったと黒桐に報告するのはひどく憂鬱なんだが」

不機嫌そうだったトウコは酷い目付きのまま口元だけで笑った。

確かに幹也なら話の全容を把握した上で問い詰めるべき人間を問い詰める所まで一人でたどり着くだろう。

結果としてそこに幹也の死があるのは言うまでもない。

幹也が死ぬなんて想像するのも面白くない。

「やっぱあれ、オレじゃ勝てないか」

「お前の眼なら届くだろうが、届く前に死ぬだろうな」

「ほんと、どうかしてるよこの街は」

殺気から気を紛らわすための戯言だと分かるのだろう。分かった上でトウコは付き合ってくれている。

「仕掛けてくるようならお前は逃げる。私の方はどうでもなる」
「……お前を殺すほど間抜けな奴ならオレでも勝てるんじゃないか？」

だからこれはお返し。魔術師としてのトウコは勝てる算段をつけた上でしか動かないが、蒼崎橙子という人格はそうでもないんじゃないのかとオレは思っている。

「それもそうだが。まああまり過敏になっても仕方あるまい。まだ昼日中だし仕掛けては来るまいよ。大人しく監視されようじゃないか」

「接触してきたらどうするんだ？」
「知らん。最悪依頼人に尻を拭わせればいい」
「そこまで逃げ切れればいいけどな」

言ってトウコは車を車道から脇道へと入れた。
お互いの精神状況に余裕を与えるための言葉はもう必要ない。
何しろホテルに着いた。

この期に及んで仕掛けてくるような馬鹿なら如何に力を持つともトウコの敵ではないし、オレも遠慮などしない。

魔術的素養を持つ人間を見つけたが為の一応の監視なのだろう。

「大体私の魔力量は精々一般的な魔術師並だ。必要以上に警戒される事もない」

「その割にはイライラしてたじゃないか」
「当然だ。喧嘩を売られてイラつかないほど人間が出来ていないんだよ、私は。仙人になりたいというのに未だに人の世と関わってい

るのだからそのあたりが私の限界だろう」

言いつつトウコはドアマンに車の鍵を押し付ける。可哀想に。

「なんで眼鏡持ってたんだ、トウコ」

「まさかとどまる事になるとは思うまい」

出発時にはオレも同じ考えだったのだから返す言葉に困る。

「知人が予約を取っていると思うんだが。蒼崎、と言う」

「承っております。お部屋は805号室になります。係りの者がご案内しますので」

寡黙そうなベルに先導され、一般的なホテル通りに部屋へと通された。

室内の簡単な説明の聞き手をトウコに任せ、オレはベッドへ腰掛ける。窓の外にはここより高い建物がない。

「なるほど、気を使ってくれたらしいな」

それはつまりこの室内を狙撃できるアングルが存在しないということ。トウコの様子から見て魔術的にも機械的にも盗聴器のようなものは仕掛けられていないらしい。

トウコは簡易なルーンの人避けを部屋に配置している。

「オレはちょっと街を歩いてくるよ」

「やめておけ、と言いたい所だが、構わんよ。つけられるようなへまさえしなければな」

トウコの無駄口に片手を上げて答え、オレは日が落ちつつある街

へと繰り出した。

とあるビルの屋上。街中の大半を見渡せる数少ない場所にその男は立っていた。

ビル風に煽られる事もなく、常人の視力では人の顔など判別不能なほどに大地から離れたそこは、男にとってこの上なく偵察に適した場所なのだ。

（凜、魔術師を確認した。私見ではマスターとは思えない。どうするかは君が決める）

（拠点だけ押さえて一度戻ってきなさい）

ほとんど意見のみを述べたに等しい言葉を間断無しに是とするマスターの信頼は好ましい。だが。

ちらりと車を降りた二人組の顔を眺める。少なくともサーヴァントではない。

あれだけ強烈に殺気を当てたというのにまるで気付かないのだ。考えすぎだとは思うが。

（了解した、マスター）

男は溶ける様に姿を消した。

1 日目・夕方・殺意と二人（後書き）

特には。

1 日目・夕方：教会にて（前書き）

永遠に続く一日目。再現された聖杯戦争などよりよっぽど異常だと彼等が気がつくのは一体何時になるのだろうか。

1日目・夕方：教会にて

「それじゃ、俺達は深山町の見回りってことでいいんだな？」

これは最終確認だ。

能動的に動こうにもあちらが乗ってくれないと聖杯戦争は話が進まない。結局自分たちを囷にあちらが出て来るのを誘う、という作戦になった。

大聖杯の動向は見回りの後に全員で大聖杯へ向かう、という方向で話が決まりつつある。

「ちょっとまって。アーチャーが魔術師を確認したって」

「それじゃ、作戦変更か？」

回りくどい手よりは直接的なほうが被害も少なくて済むように思う。

若干の期待を込めて遠坂を見る。

「どうかしら。マスターとは考えにくいし、少なくともサーヴァントが存在する気配はなかったそうよ」

だと言っのにどうやら外れらしい。遠坂の声も重い。

「召喚してなかっただけじゃないのか？ だいたい外来の魔術師がセカンドオーナーのお前に挨拶なしって変だろ」

「確かに礼儀は欠いてるけど、魔術的な用向きでもないのにわざわざ連絡するのは稀よ？ ちょっと旅行に出た先が魔術師の縄張りだなんてこともあるんだから」

「それはそうかもだけど、可能性がないわけじゃないだろ？」

言ってることは分かる。けど少しでも可能性があるなら潰すベ
きだ。

今取り得る手段が消極的なだけに俺には町の巡回の前にその確認
をしておくべきだと思った。

「あのね、士郎。セイバー達が現れてまだ24時間経っていない計
算になるのよ？ 完全に周期外れ。それも協会には大聖杯の消失を
伝えているのだから外来の魔術師が聖杯戦争を意図してこの街を訪
れるには早すぎる。可能なら確認しておきたいけどまず無関係でし
よう」

「けどもう外来の魔術師以外にはマスターになれる人間はいない
んじゃないのか？」

そう。問題はそこなのだ。土着の魔術師ならばセカンドオーナー
の遠坂が知らない訳がない。

けど外来の魔術師なら聖杯戦争においてどこを拠点とするかな
んて、早々分かるものではない。ホテルの部屋を片っ端から確認し
ていくわけにもいかないし、そもそもそういう場所を避けられたら
探しようがないのだ。

「あと一人心当たりはあるけれど、多分違うわね。あそこはウィッ
チクラフト専門だもの。わたしを正しくセカンドオーナーと認識し
ているし、聖杯戦争の知識もある。さっきギルガメッシュが言っ
ていた通り私達と敵対するリスクを分らないわけではないでしょう
し、そうでなくても教会に報告ぐらいはすると思うわ」

「ならなおさら――」

「シロウ。何かしなければならないと逸る気持ちは分かりますが。
我武者羅に動いた所で成果があるとも思えません」

更に食い下がろうとした俺をセイバーが諫めた。

自分でも気が急いているのはよく分かっている。だけど俺は聖杯戦争に巻き込まれたあの頃と違い、いろいろな事を知ってしまった。落ち着こうとすつかり冷めた紅茶を流し込んで、ふと周囲の人数が減っている事に気がついた。

「それはそうだけど――ってランサーとギルガメッシュはどこに行つたんだ？」

教会の奥へと去っていったギルガメッシュはともかく、長椅子に詰まらなそうに腰掛けていたランサーの姿も見えない。

「彼等なら釣り竿を持って埠頭に。いきなりやってきて食事をたかるつもりなのですから、自分の食い扶持ぐらいは取ってきて貰います」

当然のようにカレンが答えた。サーヴァントに食い扶持を要求するマスターというのもどうかと思う。

意図して召喚したわけでは無いのはわかるのだが、ちょっとギルガメッシュとランサーには同情せざるを得ない。

「暢気なものね、全く」

呆れたように遠坂が呟いた。完全に同意する。

「リン、それは違う。彼等は切り替えるまでもないのです。日常も戦場もあるがままに受け入れられる。彼等の気構えの大きさは私がついぞ持てなかったものだ」

眩しそうに目を細めるセイバー。俺の知るセイバーではない彼女は、答えに至ったのだろうか。

幾分やわらかくなった印象を覚えるが、未だに俺はその事をセイバーに聞けずにいた。

「貴女はまじめよねーセイバー。アーチャーまで埠頭に行ってくるって。あの馬鹿令呪で呼び戻してやろうかしら」

「よいではないですか。釣果は多い方が食事も楽しくなる」

少なくともセイバーはセイバーなのだなぁとしみじみ思う。夜の巡回を考えれば夕食の仕込みは早い方がいいか。

「・・・なんか疲れたわ。ところでカレン、既に現れているサーヴァントぐらいは分かったりしないの？」

軽く伸びをして遠坂はカレンに向き直る。

「残念ですが。マスターが揃わなければ聖杯戦争にはなりません。予備の魔術師の手配は済んであります——と言いますか、あちらから勝手に来てくれたのですが」

「っていうと例の埋葬機関の？」

「はい。第七位がほとんど休暇扱いで日本に滞在していたそうで、今日の夜にはこちらに着くと思います」

「へえ——って第七位ですって？」

遠坂の顔が引き攣っている。なんだと言うのだろうか。

「ええ。反応が鈍いですね。そういうわけですから無事共同歩調が取れば大幅に戦力は増大します。ま、彼女がサーヴァントを召喚するかどうかは分かりませんし、既に7騎揃っている可能性もある

わけですが」

「その第七位ってすごいのか？」

代行者なのだから言峰綺礼のようなものだろう、と勝手に想像していたが、どうも違うらしい。

「……失礼な事をうつかり聞いて衛宮士郎の首が飛んでは寝覚めが悪いので教えておきましょう。埋葬機関とは異端を狩るだけに特化した者たちの集まりです。完全な能力至上主義で予備員を含めその席は僅かに八つ。第七位は世界の修正力による不死を体現する異常でしたが既にその不死性はありません。それでも並の魔術師の百倍近い魔力量を誇り卓越した戦闘技術を持つ真正正銘の怪物です」

「百……」

なるほど、未だにへっばこ扱いから開放されない俺とは天と地の差があるらしい。

「そこも確かに凄いのですが……まあ怖い人だと思っていれば貴方も滅多な事を口にはしないでしょから、これくらいにしておきます」

「肝に銘じておきます」

カレンの呆れたような目を大人しく受け止めておく。

「私達は今日の夜から見回りを始めるからその人との話は任せるわよ？」

「ええ。その方が話は早そうですし」

後は2、3今後の方針について補足的な事をまとめ、俺達は言峰

教会を後にした。

1日目・夕方：教会にて（後書き）

引き伸ばしがしたいんじゃないんです。

ぱぱーっとそれなりに皆が活躍してるトコかければ満足なんです。
だというのに一日目が終わらない。なんなんだ。

1日目・夜：街を眺めて（前書き）

蛇足です。なんとも。

1日目・夜：街を眺めて

ぶらぶらと街を歩いている。何か目的があるわけじゃないけど、トウコと部屋でだんまりを決め込むよりは気が楽だった。

知らない街並みはよそしく感じる、なんて言葉を聞いたことがあるけど私に言わせればどこに居たって同じだ。着物姿の私に物珍しさを覚えた連中がちらちら目を向けてくるぐらいで、そんな物を黙殺するのはとうに慣れた。

新都と呼ばれる方面には私の興味を引く物はなかった。強いて言えば中央公園とかいう場所がなかなか手強かった。寄ってきた亡者は左手で押しのけた。今の私に他人にくれてやるようなモノはない。そんなわけで私は地方都市にしてはやたらと立派な橋を渡っている。

遠目に見る限りはただの住宅街なのだろう。やはり興味があるわけではない。仕方が無いので橋から川を眺めている。
だというのに。

「なにか用か？　じろじろ見られるのは好きじゃないんだけど」

振り返って歩道の上、車道横の欄干を覗む。

「帰路の途中に見た顔があったというだけの事。だいたい見られるのが嫌ならその格好を如何にかすべきだ。今時着物なんて普段着にしてる者はそういない」

気障ったらしい声を張り、白髪の男が歩道へと飛び降りてくる。その手にはクーラーボックスが一つあるだけで、何か武器を隠し持っているようには見えない。

ただ、油断だけはするなと私の獣の部分が告げている。

「そうか。じゃあ俺にもお前にも用なんてないんだろ。さっさと家に帰ったらどうだ？」

「理には適っているが、ふむ。橋の上で意味ありげに川を眺めてる美人を見かけたら一声掛けて見たくなるのも男の性というものだ」

勝手な事を言いながら、男はクーラーボックスを肩から下ろし、隣で欄干に凭れた。

冗談じゃない。遠目からとはいえ、初見で殺気を当ててくるような奴と世間話をするような安穩さを私は持ち合わせていない。

「そんなコト知らない。だいたい男がどうこう言うんなら、そっとしておくべきモノぐらい理解しろ。お前、もてないだろ」

だから憎まれ口を吐いて私は男に背を向ける。

「これは失礼をした。では中身のある話をしよう。君たちは何を目的にここへ来た？」

背後で男の気配が強張った。その気があるなら最初からそうしろ、と思う。

袖口のナイフを意識しながら振り返って男を睨む。

「……オレはただの付き添いだ。トウコも魔術師には違いないけど聖杯なんてものには興味なさそうだし。ただのお仕事だろ」

男の顔が聖杯という言葉で厳しい物に変わる。

「聖杯戦争には気がついていてということか」

「それは当然だろ。これだけ歪みきつた空気に触れて何も気がつかないなら、それは不能ってヤツだ」

初めて男が笑った。

「違う。しかしそれが分かる君も魔術師なのか？」

「オレは魔術になんか興味ないし本当にただの付き添いだ。ほら、お前が知リたそんな事は全部話したぞ。まだ引き止めるって言うならそれは無粋じゃないか？」

無粋を続けるっていうなら、こっちにも考えがある。

「嘘を吐いているとは思わないが、こちらも万が一を想定しない訳にはいかない。見かければまた監視の目を向けることになるかもしれないが構わないか？」

「知らないよ。どうせお前たちはそうするんだろうし。ほら、こっちの意志なんて関係ないじゃないか」

男の目が泳ぐ。当然だ。了承を取りたがるのは堂々と監視したいから。あつちしか得をしない取引を持ちかけるなんてあまりにも私を馬鹿にしてる。

「……最後にひとつだけ確認しておきたい。君たちは聖杯戦争に関わるつもりはないんだな？」

「降りかかる火の粉ぐらいは払うけど、トウコはそういうつもりらしい——満足したか？ オレはそろそろ戻りたい」

「ああ。礼を言うよ。一つ進展した」

満足そうに頷く男から視線を切って私は帰路に着く。詰まらない時間を過ごしたものだ。

「そりゃ良かったな。それじゃ」

おざなりに言葉を投げ、男の気配が既に無いことに気が付く。

「……参ったな。ホントに人間じゃないなんて。うっかりしてると殺りたくなっちまう」

事によつては秋隆から刀を取り寄せないといけないかもしれない。それはそれで楽しそうだなって、この時の私はそう思っていたのだ。

誰もいない会社の中、僕は何故か橙子さんのクローゼットを漁っていた。

念のために断っておくけれど、何か疚しい事をしているわけではなくて、橙子さんに頼まれた物を取りにきただけだ。部屋の隅には秋隆さんから預かった布袋を置いている。中身は考えたくない。

橙子さん達が冬木という街に出かけてまだ一日目だというのに、向こうは随分と厄介な事になっているらしい。

「送料とか誰に付けるんだろう」

以前頼まれて持ち出したオレンジの鞆なのですぐに分かった。女性の部屋に用もなく長居する趣味はない。

鞆と布袋を掴んでそそくさと部屋を後にする。

呆然とこつちを見ている鮮花と目があった。

「あれ、鮮花、どうしたんだ？」

橙子さんが出かけているというのは伝わっているはずなので、鮮花が来る用はないと思っていた。意外だ。

「……………あの、兄さんはそこで何をしていたんです？」

言葉を搾り出すのがいっぱいといった風に鮮花が呟く。

「ああ——誤解だぞ鮮花。橙子さんに頼まれたものを出してただけだよ。部屋を物色してたわけじゃないんだ」

「それはそうでしょうけど。ちょっとびっくりしました」

失礼な。所長の私物を漁るなんて死地に飛び込むのと同義だ。そこまで無鉄砲じゃない。

「僕は荷物を橙子さん宛に送ったら引き上げるけど、鮮花は何か用事か？」

「いえ、兄さんも暇なんじゃないかと思って。晩御飯でもどうかな」と

財布の状況は悪くない。ちょっと奮発するぐらいは構わないだろう。

「分かった。奢るよ。でもあんまり高い物は勘弁してくれ。これを送るまでの間に決めておいてくれ」

刀と鞆。それらを彼女達が欲する事態を考えたところで、自分に

は無事を祈る事しかできない。

「どうかしたんですか、兄さん？」

「いや、なんでもないよ」

ダンボールで布袋をぐるぐる巻きにしながら、僕は胸騒ぎから目を逸らした。

1日目・夜：街を眺めて（後書き）

次は二日目のお話ができるかと。

2 日目・未明：邂逅（前書き）

二日目だあ
ああああやっ
たあああああ

2日目・未明：邂逅

ぼんやりと夜の街を歩いていて。時計も三時を回り、夜の空気は身を切るように冷たい。

その成り立ち故か、この感覚が妙に心地よい。街灯の明かりさえなければなお良いのに、と思うのは勝手が過ぎるので我慢するべきだろう。

だけど、これは我慢しないでいいんじゃないか、なんて思う。

「こんな時に買い食いなんて、どうかしてるぞお前等」

足を止めてそう言うと、口元をもごもごと動かしたまま、二人が振り返った。

吸血鬼とそれを討つべき聖堂騎士が肩を並べて肉まんを頬張っているのは、絵面としてどうかと思う。我が身も殺人鬼で暗殺者なので指摘した所で説得力はなさそうだけど。

「食えるときに食っておくのも戦う者として必要な資質だと思うけどね」

「お行儀はよくないけど、とってもおいしいよ。えっと、七夜君も食べたらよかったのに」

本当にずれている。いや、ずれているなんて感じる俺がずれているのか。しばらくは付き合うなんて約束したものの、どうしようもなく俺とこいつらは合わない。

「遠慮しておくよ。だいたい腹に物を入れて動き回るなんて不合理

にも程がある。さつきはともかくリーズバイフェ、お前は戦う者だろう。それとも聖堂騎士つてのはそんなに緊張感のない仕事しかないのかい？」

他人に説教を呉れてやるなんて柄じゃないのだが、シオンがこの場にいない以上歯止め役ぐらいはこなしておかないと呼ばれた意味がない。

とはいえ、未だ誰が俺を真に呼んだのか、俺は計りかねている。

「リーズでいいよ。私は単独任務なんてものが回ってくるほど使いつ走りをしていなかったからね。食料調達を自前でするなんて経験、あまりないんだ。それに七夜君が言う通りさつきはこういう荒事に慣れていない。過度の緊張は動きを阻害するだけだと思うんだ」

「・・・・俺には緊張感が足りなさ過ぎるようにしか見えないが。まあいいよ。俺のクラスがアサシンである以上、俺以上に暗殺に長けたやつはこの街にはいないはずだ。意識を切り替える間もなく死ぬようなことにはならないだろうさ」

半ば投げやりに呟いた。そもそも俺は別行動を取り、二人を見守りつつ現れた敵に奇襲を掛けるべきだと提案したのだ。それを一人で歩き回るなんて寂しいよ、なんて戯言で退けられたらもう俺の理屈では何一つ通せない。

「確かにあまり時間は無い。聖杯がタタリによる再現である以上、タタリが確定するまでに他のサーヴァントを退けておかないといけないからね。だからこそ気が緩んでいるように見せておいた方が都合がいいと思うんだ」

騎士の言葉は分かりやすく俺を説得しようとしている。納得はしていないけど、従う意志は見せているのだから放っておけばいいも

のを。

「まあ、なんだって構わないさ。だってほら。向こうから来てくれた」

視線の先に悠然と立つ槍兵を見据え、俺は袖口からナイフを引き抜いた。

先ほど会った時とは違い、ランサーは青い装束と赤い槍を携えていた。

緩い空気など欠片も無い。狂気に押されて暴力を振るう者でもなく、場に流されて戦うことしか出来ない者でもなく。真に戦う者がそこに居た。

やはり半端ではない。背後でさつきを庇うようにリリースが前に出る気配があった。

お互いに視認した状況では暗殺者としての技能のほとんどが用を成さない。加えて——どこからか別の殺気を感じる。単独ではなさそうだ。

「よう、女侍らして随分と楽しそうじゃねーかアサシン——で、いいんだよね？」

「楽しそうに見えるならアンタの目は節穴だよ、ランサー。で、俺を袖にした用は済んだのかい？」

軽口には軽口で返す。何よりこちらに必要なのは時間だ。

（レン、ランサーと出くわした。恐らく遠距離から別のサーヴァントの監視を受けてる）

（………了解したわ。出来るだけ時間を稼いで置きなさい。そっちは私達で探してみるから）

「なんとかな。サーヴァントと会ったって報告したら、不能呼ばわりだぜ？ こっちはマスターの命令に従ったってのによ」

「それはご愁傷様。それで俺の前に現れたって訳か」

「そういう事。駄犬呼ばわりもいい加減癪だからな。そろそろ使えるところを見せておかないと。ところでどっちがお前のマスターだ？」

ランサーのねめつける様な視線にさつきが喉を鳴らした。

「生憎とどっちもマスターじゃないよ。アンタが言ったんじゃないか。女侍らして楽しそうだった」

「はっ、ふざけた野郎だ。ま、安心しな。マスター殺しなんぞ詰まらん真似はしねえさ。てめえらには話があるんだ。ちつとばかり痛い目見てもらっぜ」

すっ、と槍を構えたランサーの体が沈み込む。

応える様に俺は身体を半身に開く。

「付き合わないわけにはいかないか。こいつは任せろ。もう一人こっちを見てる奴がいる。あんたらはそっちを注意しておいてくれ」

こいつの速さに付き合えるのは俺しかないのだから足手まといは少ない方がいい。

意図を察したのだろう。リーズがさつきを連れて距離を取った。

「・・・・・・・・あの野郎、余計な真似を」

ランサーの表情が苦いものになる。

少し呆れた。卑怯だなんだと文句をつける気はないし、そんな事をいちいち気に掛けられたのではこっちが興冷めする。

何しろこっちの血液は熱を持って体中を暴れまわっているのだ。

「さあ、殺し合おうぜ槍使い」

2日目・未明：邂逅（後書き）

中身がないじゃないですかやだあああああ

2日目・未明：七夜志貴とは。（前書き）

七夜志貴っていうところんな解釈を2次創作では見ますが、この七夜君はどうしよう。

2日目・未明：七夜志貴とは。

学生服に凡庸な顔。大した魔力も感じられず、ともすればただの人間としか思えない凡庸な風貌でありながら、七夜は常軌を逸した殺意をまつすぐにランサーへと向ける。

そのくせ表情は楽しげに歪んでいてどこかアンバランスな印象を与える。

あるいは見せかけの狂気。暗殺者としての七夜の思考は冷静に彼我の戦力と奇襲の是非に終始しているのだから。

彼我の距離は十メートル前後。間合いを詰めなければならぬのは長物を繰るランサーではなく、短刀を武器とする七夜だ。故に七夜は槍を構えた姿勢のまま動かないランサーを注視する。

穂先を低く押さえるような構えは防御に向くものではない。確実に七夜の挙動に獲物を合わせられるという自負から来るものだ。

ならば、と殺人鬼としての七夜は考える。

まずはその自負を打ち砕くべきだろう、と。

七夜の取るしゃがみ込むような低い姿勢は騎士の礼に似ている。ただ、その顔だけは真っ直ぐにランサーを向き、その眼は爛々と蒼く澱んでいる。

「まずはようこそ、と言わせてもらおうか」

夜は人の時間ではなく。

周囲を人工物に囲まれ、中途半端な人工光に陰影を与えられたこの場は。

獣であり、蜘蛛である、七夜の舞台だった。

「この素晴らしき惨殺空間へ」

瞬間、ゴムの焼ける匂いと共に七夜の姿が掻き消える。

それはつまり魔術や異能ではなく、単純に身体能力のみでヒトの動体視力を上回る動作を行ったという事。

七夜という気配が消えて、実時間にして一秒に満たない空白。

ランサーは構えを崩し、槍を後方へ薙ぐことでそれに応えた。
ぎいん、と甲高い金属音。

まともに受ければ人の体など軽く吹っ飛ぶ一撃を、七夜は重心を逃がしつつ、その場に伏せる選択でやり過ごす。

当然ランサーはその隙を見逃さない。発条仕掛けのように起き上がった七夜を外し、神速の突きがアスファルトを耕した。

構わずランサーはその突きを繰り返して続ける。

未だトップギアには程遠いランサーの攻撃とはいえ、その全てを躲し、あるいは小さなナイフのみで逸らす。突きという動作は線だが、七夜の眼がランサーの突きを線として捉える事が出来ていて初めて出来る芸当だ。

加えてランサーの突きは決して単調な物ではない。突きと引き戻しに巻き込まれずにその場に立ち続けている七夜の技巧は異常と言えた。

（なんだ、これは）

出来すぎている。一連の行動を行っている七夜自身がそう感じた。体の動きは自分が無様と嘆いたそれではない。幼い日に見た父のそれともどこが違う。

まして、本来七夜の体術は隠行と相手の眼を誤魔化す加減速から成る物であって、このような怪物と正面から打ち合う為にあるものではない。

「っは、こいつはすげえ」

困惑する七夜はそのままに、ランサーは楽しげに口元をゆがめた。そのくせ眼は笑っていない。十全のそれとは言わないが、己の積み上げた技巧を容易くいなされては面白くないのは当然だった。

「そいつはどうも。もう少し早くなると途端に怪しくなるけどね」

応える七夜の表情は無い。狂気染みたソレはあっさりと影を潜めている。ランサーの眼はその逡巡を侮辱と受け取った。

「チツ、あっさり腑抜けてんじゃねえよ。オラッ！」

今度こそ掛け値なし、神速の突きが七夜を襲う。

七夜の眼でさえ穂先を点と捉えるのが精一杯な速度。ランサーの脚力ならあるいはあっさり追いつかれてしまうとはいえ、既に回避以外の選択が考えられない死地。だというのに何故か七夜の体は回避を選択させない。

代わりに。

——閃鞘・八点衝——

ほとんど無意識に右手が奔った。それさえも乱雑に振るうだけの己の技ではない。自分でもどうかと思うぐらいに見事にランサーの突きに刃先が合う。サーヴァントとなった事による身体能力の向上が原因ではない。その証拠に脚は突きの威力を流すように絶えず重心を変え、後ろに下がるように流れている。

（どうなってる）

七夜には戦える、という現実以上に己の上に行く技巧を為す自身が理解できない。

そして、七夜が見せた技巧は、ランサーにある決断をさせるには十分すぎるものだった。

「……やめだ。てめえを生きて捕らえるなんて温い考えはやめた」

どくり、と七夜の心臓が脈打つ。淨眼が急速に槍へと集る魔力の流れを伝え、本能が困惑を押し殺す。

アレを受けてはならない、と全霊が明滅するように主張する。軌間の豪腕からですら、あの槍ほどの不吉を感じなかったのに。

「その心臓、貰い受ける」

受け手が浮かばない。逃避は叶わないと理性が嘆き、本能がニゲロニゲロと喚き散らす。

ならば、差し違えてやろう、と七ツ夜を高く構え、

「刺し穿つ死棘の――」――極死・七――」

「l i f e l e d b r e a k d o w n , b e c k o n f o r t h e f i c t i o n ! ! ! 」

悪性情報の渦に一切合財が飲み込まれた。

2日目・未明：七夜志貴とは。（後書き）

いろいろ実験的なことをしてみたのですが、読み難くなっていなければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7500q/>

（習作）白猫が願うモノ

2011年3月2日19時55分発行